

特224

2

金



0027385000

0027385-000

特224-2

金

藤本ビルブローカー証券株式会社調査部・編

藤本ビルブローカー証券株式会社

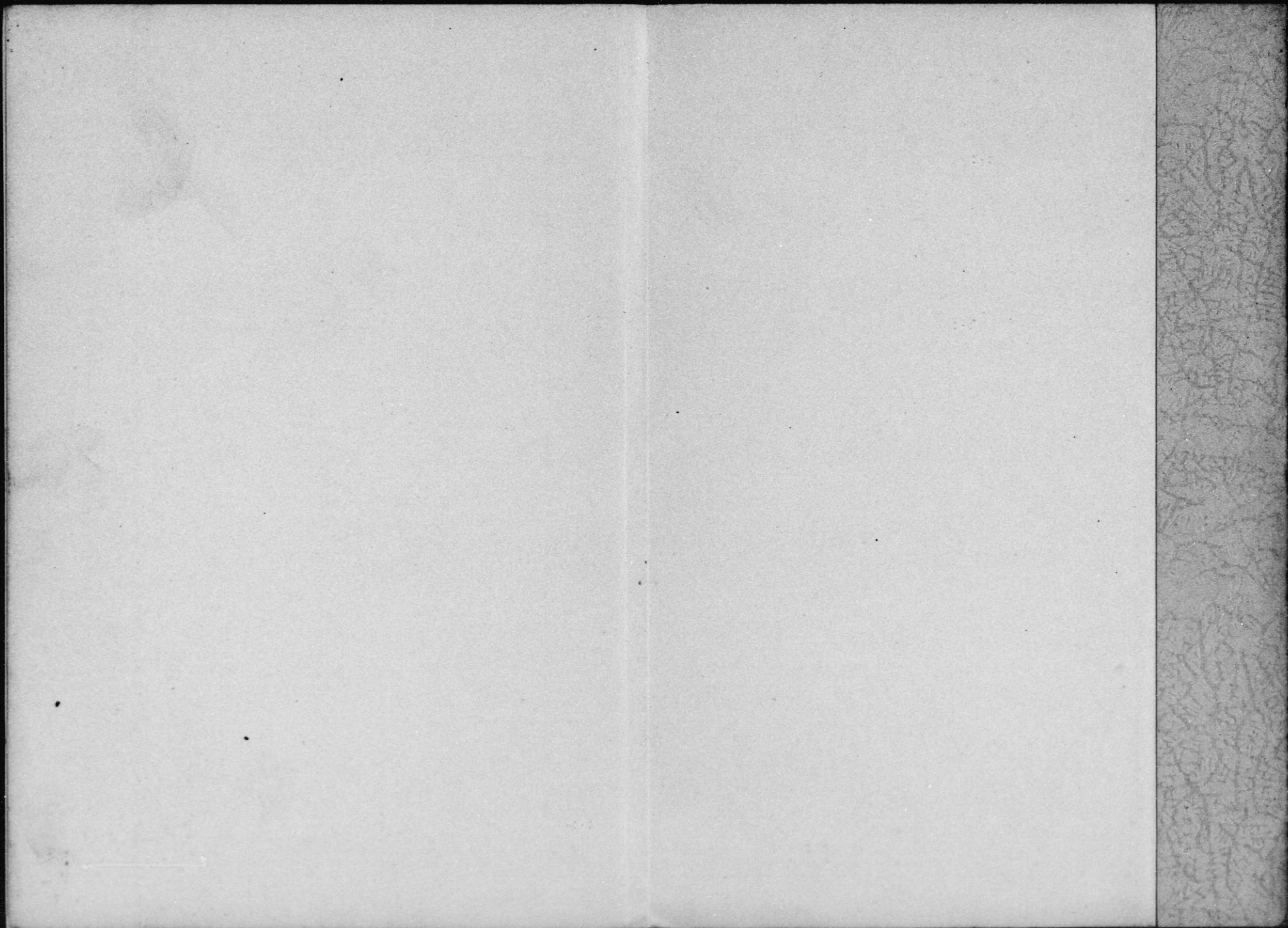
昭和15

ADH

特224

2

金



特224
2



藤本ビルブローカー証券株式会社



金 目 次

第一章	序	一
第二章	金の基礎知識	
第一	金の特性	二
第二	金の用途	三
第三	貨幣としての金	一五
第三章	金の需給	
第一	金の需要	六
第二	金の生産	二
第三	金の移動	九
第四章	世界産金史概説	
第一	世界産金発見史	三

第二章	我國金鑛發見史……………	三四
第五章	金の出来る迄……………	
第一	金鑛の産状……………	三九
第二	金鑛の採掘……………	四二
第三	金の製鍊法……………	四七
第四	賣鑛と自山製鍊……………	五四
第五	産金技術の進歩……………	五五
第六章	戦時經濟下の金問題……………	
第一	金動員の重要性……………	五九
第二	正貨準備としての金……………	六五
第三	我國金政策の發展……………	六六
	(イ)金輸出再禁止後の金政策……………	六九
	(ロ)金買入法の制定……………	七一
	(ハ)金現送と金買上價格引上……………	七二

(ニ)産金法の制定……………	七五	
(ホ)金準備評價替と金資金特別會計の設立……………	七六	
第七章	本邦産金事業……………	
第一	内地の産金事業……………	八三
第二	外地の産金事業……………	九〇
	(イ)朝鮮に於ける産金事業……………	九〇
	(ロ)臺灣に於ける産金事業……………	九六
第三	主要金山の概況……………	九九
第八章	金動員の積極化……………	
第一	日本産金振興株式會社の設立……………	一〇六
第二	産金獎勵規則の改正……………	一〇八
第三	増産金買上價格割増制度……………	一〇九
第四	産金量届出規則……………	一一三
第五	買上代金支拂の便法……………	一一三

第六	民間保有金の集中……………	二四
第七	金使用制限の強化……………	二六
第九章	今日の世界金問題……………	一九
第一	金過剰の問題……………	二〇
第二	金生産の増大……………	二三
第三	退蔵金の解放……………	二五
第四	金需要は衰へず……………	二七
第五	米國の金問題……………	三一
第十章	結 言……………	三五

——我國産金事業の將來——

附 録

金に關する參考法令

序

いま、我々國民は支那事變に處して、破天荒の偉業を完遂しやうとして、まさに畫龍點睛の域に這入らうとしてゐる。他方歐洲では獨、英を中心とする兩プロツクの勢力間に、第二次歐洲大戰最後の激闘が展開されてゐる。近代戦に於て戰闘技術の高度化は、愈々出で、益々驚嘆すべきものがある。

かく、戦争の「幅」と「深さ」の擴大は、世界の各國を

物資供給力の擴大に向つて、益々狂奔的に驅りたてゝある之に伴ひ、資材購入代金としての、國際通貨「金」の地位は、愈々重要性を増して來た。恐らく今日ほど、金の注目されるときはあるまい。物資自給性の未だ十分でない我國に於ては、殊更に然りで、戦時の重要經濟對策は、悉く金に焦點を求め得ると稱するも過言でなく、金は聖戰遂行上の原動力である。従つて時局下産金を擔當する事業が、國家的に重要産業であるかは呶々を要しないのである。

巷間、金に關する刊行は必ずしも尠しとしない。然し類

書多くは金の素材的、鑛物學的、鑛床學的、冶金學的方面に亘る技術的叙述に偏し、今日生きて動く金の經濟性能をも、併せ解説せるものは、鮮いやうである。本書刊行の趣旨はこの二者何れも兼ね、而も具體的解説をとり、極く一般的な理解に寄與せんが爲めである。

本書は、かゝる意圖によつて弊社調査部員の業務繁多の間に閑暇を偷みて成れる努力に基づくものである。固より粗笨、且つ餘りに通俗に墮し、所期の意圖を果し得なかつた點も決して尠しとしない。而も、敢へて上梓する所以の

ものは、現下の時局が、金に關する國民の一般認識を要請すること、極めて切要なるものありと考へたからである。冀くば此の渺たる一冊子、聖戰時下、輝く興亞の大業に聊か貢獻する處あらば、望外の幸甚とする處である。大方諸彦の御叱正を賜はらんことを。

昭和十五年九月

藤本ビルブローカー証券株式會社

取締役會長

松 葉 恭 助

自序

資材の豊裕とは金が豊裕と云ふのと同義語だと謂へる金の獲得の爲めの現状打破ともなり革新とも爲るのでないか、高度國防策の完遂も、風格の昂揚も、ゴールド イズ オールマイチイ とも言へぬことも莫い。

フンク獨逸經濟相の觀念では貨幣に對する從來の理念に違つた方向を示唆しては居るが之れは同一ブロック國家間、少くとも主權の下にある國家内に在りては或は妥當性があるかと思はれるが、一步異殊ブロック國家間、又は他の國家に對しては此觀念は通用しない譯である。従つてフンク獨逸經濟相も「國際貸借の決済は金に據る外はない」と云ふことを肯定して居る。即ち金の獲得に成功したら世界の覇者と爲り得る。戰爭は最大の消費者だ。此消費の充分な補填を爲し得た者が戰勝者と爲り得るのだ、戰爭には勝たなければ

ばならぬ以上資材の豊裕なる蓄積が必至條件である。喰ふか喰はれるか、此の爲に金を蓄積するのは、換言すれば金が物を謂ふからである。長期聖戦下の我國は大東亞新建設の目的達成に奮進して國內産業の擴充強調に餘念ないのである。産金奨励強化も亦此圏外を出でない。此小冊子は我本土内に於ける金鑛の現況と、金に對する國家の方策を極めて平易を旨として叙述したものであるから、科學的の鋭刃を以てせば如何にも物足らぬ事は多々あらうと思ふが、敢て上梓して江湖に頒ち叱正を請ふ次第である。

皇紀二千六百年葉月

編纂者

自識

第一章 序 說

(一) 戦争をする爲めには、莫大なる物資が消耗せられる。戦争即大消費であるを考へても間違でない。殊に近代戦は周知の通り、航空機及び兵器其他の軍備品が著るしく機械化せられてゐるから、其の戦争形態は一層複雑且つ大規模となる。従つて人的、物的消耗に至りては全く想像外に大なるわけである。而して近代戦は長期戦の形態をこるのが最も普通であるから、此の物資大消耗に對して、物資の補給を如何にして爲すべきかは、戦時經濟に於て、第一の緊急事である。繰返し述べるが、戦争は紙幣で戦はれるのではない。物（勞力を含む）で戦はれ、金で戦はれるのだ。必要なのは、物であり、金だ。一にも「物、金」、二にも「物、金」三にも「物、金」である。ナポレオンは戦に必要なものは一にも、二にも亦三にも金であるを喝破してゐる。自國內に於て現

實に存する物の範圍内に於て、戰時經濟が賄はるれば、それで良いが、周知の通り我國の經濟は元來が多分に海外經濟に依存してゐるのだから、物資蓄積の表象である金を以て、海外から戰爭に必要な物を獲得せねばならぬ。極端なるブロック經濟に迄進展すれば、自ら別箇の問題であるが、尠くも現在に於ては、金があれば海外からの物の調達は、隨意であること云はねばならぬ。茲に金が物と同一程度、否、それ以上の重要性を持つ所以があるのである。而して其重要性とは、我國の經濟が戰爭遂行に必要な雜多のあらゆる「物」を現實に調達し得ることが困難なところ、換言すれば、我國經濟の海外依存性に因由するのである。金の必要性は、戰爭遂行には絶對的だ。現状では、何として、——將來的には南洋を含めた東亞ブロックの緊密な連繫の下に資源の開発が促進される、——石油、銅其他軍需資材又は生産力擴充に必要な物資にして、海外よりの輸入に俟たねばならぬものが、多々あることを否定し得ぬ。そ

れで生産力擴充と同時に輸入力の増進、即ち豊富なる金を必要とするのである。殊に往時の日清、日露戰爭の場合に於けるが如く、外貨輸入の困難視せられる際に於ては、金の必要性、絶對性は一層強調されねばならぬ。

斯く考へてくると、金問題は戰時經濟の基本であり、發足點である。戰時經濟は金問題の動向に依つて制約される事が了解されやう。つまり金問題を基底として、戰時經濟の諸對策發展を見るのである。之は別の言葉で云へば、金の戰時經濟支配であり、金の經濟征服、勝利を意味するものに外ならぬ。戰爭は一切金に繋がりを持つてくる、と云つた如き表現を使用しても決して誇張ではないと信ずる。

金はキン、わうごん、こがね、とも呼ばれる。元來金と云ふ字は、カネと訓まるべきで、金屬と同一字義である。又貨幣は俗語に於てオカネ(お金)とも呼び「金」はキンともカネとも呼び得るのである。然し何時しか金と記してキ

んどさるゝに至つたものである。

(二) 金の重要性に就て、又別箇の觀察を下して見やう。金の重要性は「どんな商品にも代り得る物」、即ち「一般的等價物」であること云ふ點に存するのである。金の商品である一面と共に、反面に於て貨幣である反面がより重視すべき點である。而して商品としても、金は他の凡ゆる商品とは全然異なる。即ち金は如何なる商品とも交換し得る商品である點である。他の商品にして、「如何なる商品とも交換し得る」が如き便利な商品は絶対にないのである。それは常に一應金、貨幣の形に於て還元されねばならぬのである。之は云ふ迄もなく金が貨幣たる反面を有するが爲めである。貨幣たることが、金のすべてを決するのである。尤も學者評論家の一部に於ては、金準備は國內通貨の基礎としては不用で、對外決済手段としてのみ意義を有すると論ずる者も多いが、其の偏見たりや申す迄もない。ただ通貨が國內的に統制、管理されると、一見金が通

貨基礎として何等役立つてゐないかの如く観える。然しそれは皮相の觀察で、金が通貨の基礎たるには何等變りはない。金であれば、國內、國外を問はず古今を問はず、千古不變、如何な物をも買ひ得るが、紙幣ではさうは參らぬ。金は如何なる「物」をも買ひ得る。即ち物は one thing であり、金は everything である處に物に一段勝れたる特性がある。論者或は云はん、國際的な物々交換例へば滿洲の大豆と獨逸の機械類の如き交換協定が行なはるれば、金なくとも差支なしと。然しそれと雖も其の間の面倒さ、金の「行くとして可ならざるなし」には及ばないのである。

世上アメリカに金の偏在するの事實を目して、他の諸國にして、擧つて國際決済用としての金を否認すれば、金の價值は大いに變化すべしと危惧する者もあるが現状に關する限り一種の興味論の範圍を出でない。(別章参照)

戦争と金との連繋性、關連性の離るべからざるは、上述の處で分明するであ

らう。かるが故に政府に於ても、其の必要性、重要性を充分に認識する處があり近時の金政策は著るしく強化を見てゐる。其の反映は、産金法、金準備評價法、重要礦物増産法、日本産金振興株式會社法等、一連の金政策に反映してゐる。産金法は、金の集中、管理を目的とするものである。金鑛業者、金製錬業者に對して輸入税の免除、奨励金交附等を規定し、新産金の増加を企圖せんとするものだ。重要礦物増産法は、産金業者の自發的金増産をかを、數歩前進せしめたるもので、強制的金増産を企圖するものだ。又昭和九年四月金買入法の實施、而して數次に亘る金買上價格の引上、民間の金動員運動、金製品の賣戻條件附買上實施、産金奨励、増産等金集中の爲めには、あらゆる政策が實施されて今日に至つた。之等の事實に就ては、章を改めて論ずること、するが、兎に角、金集中、金増産の必要は論ずる迄もないので、寧ろ、諸種の點に於て一層強化されねばならぬ。又その趨向に在るものと云はねばならぬ。傳へられ

る金増産目標は五ヶ年後の昭和十八年に於て大約内地〇十吨、朝鮮〇十吨、合計〇〇十五吨（時價〇億八百九十五萬圓）産出に在る。之を昭和十一年度の内地、外地産金約四十一吨、一億五千萬圓（昭和十二年度及以降發表されず）に比し著るしく増産であり、滿洲國に於ける五ヶ年後〇億圓の産金増産計畫と併すと、五ヶ年後に於て〇億八、九百萬圓の産金となる勘定である。然し此増産を敢行するには、容易ならぬ決意を要する。政府は金輸出を嚴禁するに拘らず坊間に於ては盛んに金輸出を計畫するものありと。嘗ては、本邦の金價は、却つてソビエツト及び支那に比し高かりしを以て、本邦に向つて密輸入されつ、あつた事實を如何にせんやである。之が對策を如何にすべきや、「金と銀」の著者岩崎重三氏は「……否彼地（英米諸國を指す）の金價より高くせねばならぬ。これが眞の非常時對策である。これ余が衷心より憂國の士に訴ふる所以である。若し斯くするときは本邦の金は今より更に増産するであらう。何となれ

ば本邦には更に多くの金鑛あるも此等は含金少き爲め、捨てられればなり」と説いてゐる。蓋し多くの金鑛あるも「含金少き爲め、捨てられればなり」の一言は蓋し味はふべき金言であらう。マルコポーロは「東方に國あり其名をジパングと云ふ」と云ひ、金の多いこと、掘れども盡きないことを述べてゐるが、之は必ずしも大法螺ではないので、我國に於ては、昔から金があり、其の金は、今尙盛んに産出しつゝあり、眞に掘れども盡きない、只採算に引合ふ金鑛が、數多く發見されてゐないこと云ふに止まる。されば掘り得る様にするこゝ、之が絶対必要なのであるまいか。

(三) 東西古今の産金史を繙くと、金増産の爲めには、人類はあらゆる努力を拂つてきた事が判明する。シベリヤの凍原、アフリカの砂漠に至る迄、探鑛に全力を注いでゐる許りか、化學者、物理學者も、其の全智能、全能力を竭し或る者は海水中の金を得やうとし、或る者は思ひも及ばざる方法で他の元素か

ら金を得やうと試みてゐる。之れ等は或る程度迄成功したかに傳へられる。然し僅か一匁の金すら、果して製出し得るか、更に採算的に製出可能であるか、所詮大きな謎であること云ふの外はない。金に對する人類の憧憬、金に對する魅力に變化の來らざる限り、黄金の桎梏から脱し得ることは困難である。金は空氣中、水中にあつても、絶対に錆を生じない、永遠に變らざる美しさ!!、之が金に對する魅力であり、此の魅力は全人類のやがて崇拜となつてゐるのは蓋し當然と云ふべきであらう。

金が如何に、重要且つ必須であること、以上の如くであり、世上の至寶であるに拘らず、鑛山經營者を遇するに山師と稱するの如何に不當なる。徳川家康は「諸人金銀の寶を以て世を送るも偏に山師金掘師のする所にして其功重大なり」と喝破してゐる。家康の云ふ山師とは鑛山を經營する處の鑛主、金掘師とは坑夫に與へたる名稱で、之に「師」の名稱を與へたるは、特別なる尊敬を表

象したるものに外ならぬのである。本書題して「金」と謂ふ、其の本書に於て述べんとする處は、此の戦時下に於て、最も必要である處の金に就て、最も常識的な點を總記して、以て「金」讀本たらしめんとするに在る。

第二章 金の基礎知識

第一 金の特性

何千年の昔から、金は貴金屬中の王者として尊重されてゐる。人老ひ物移る世の中にあつて、金に對する執着と言ふか、魅力と言ふか、憧憬と言ふか、永久に渝るところはなさうである。何ゆえにか。太古、神の御姿を飾り、祭壇に鏤められた、その色と光が、最も民衆の心を奪つたであらうことは想像に難くないが、たゞに色や光ばかりではない。他の何れの諸金屬にも勝る特性を有するからである。即ち

- (イ) 特有の山吹色と優麗柔和な光澤を有すること。
- (ロ) 展性、延性に富むこと。

展性とは鎚で敲いて箔となし得る性質で、延性とは引いて針金とする

性質であつて、一瓦の金は、 0.6 平方メートルの箔に打展し得ると共に、長さ二釐の線に引延すことも出来る。この二性質は造幣材料として不可欠なだけでなく、時計、指環、蒔繪等美術工藝用としても最適である。

(ハ) 火にも酸にも侵され難いこと。

金は攝氏一、〇六三度でなければ熔融しない。従つて普通の炭火や瓦斯火でも熔けもせず、變化もしない。また、金は塩酸、硝酸、硫酸、苛性アルカリ、炭酸アルカリ等、他金属を容易に溶かす薬品に對しても平氣である。たゞ青化加里、青化曹達の溶液と、王水（硝酸、塩酸の混合液）には熔ける。

(ニ) 比重大なること。

金は白金やイリヂウムを除くと金属中で最も重い。比重は一九・三、

つまり同體積の水の一九・三倍の重さがあつて、銀の一〇・五に比べるときざつと二倍である。

等の勝れた特質を有つてゐる。

たゞ、強ひて云へば金にも一失はある。それは硬さの足らぬことである。然し銀、銅其他を加へて合金とすれば、甚だ強靱にして弾力に富むものが出来る。金貨にしても、諸種の装身具にしても銀や銅を混ぜて使用されるのである。

第二 金の用途

金は右のやうに多くの勝れた特性を有つ。従つてその用途も頗る廣い。先づ第一に最大の用途として貨幣があり、次いで合金、裝飾、薬品等がある。

このうち「貨幣としての金」は、特に次項に改めて述べることにして、こゝには合金以下其他の用途だけを擧げる。

(イ) 合金

金はその柔軟性を補ふためいろ／＼の金屬と融合して合金を作る。合金すると相手金屬によりそれ／＼特有の光澤と硬度を増す。而して合金の成分を示すには、多く「カラット」又は「金」なる語が使はれる。二十四金とは、純金のことで、十八金とは合金二十四瓦中に純金が十八瓦の割合で含まれることである。次に主な金合金とその用途を示さう。

金 銀 合 金……裝飾用又は貨幣原料として古代より既に使用された。

金 銅 合 金……造幣材料又は裝飾用として最も普通に使用されてゐる。

金ニツケル合金……所謂白金のことで、白色にして非常に硬い。裝身具として用ひられる。

金白金の合金……硬くて弾力に富み、人絹、ス・フ製造用のノズル（紡糸口）となる。

(ロ) 金 箔

金を鉄鏈にて、一分の三千分の一程度に薄めたもの。我國獨特の技術

で、これあればこそ、僅かな金で堂屋を張り、精巧な金絲模様をも織出せるのである。

(ハ) 裝飾品其他

金の優麗な光澤と酸化しない特質は、時計、指輪等裝飾用として好適である。また事務家の忠僕たる萬年筆のペン、美人の皓齒を繕ふ金冠等の用途は吾々の日常生活に馴染みは深い。

第三 貨幣としての金

然し金の主たる用途は、何と言つても貨幣材料たるにある。一体、貨幣材料にはどんな條件を要するか。それには(1)その色と光が萬人の愛好するものなること、(2)他材料との識別が容易であること、(3)化學的にも物理的にも不變であること、(4)造幣に適するやう展性、延性に富むこと、(5)その産出が甚だしく稀少ではなく又多大であつてはならぬこと、等々幾多の條件が必要

であらう。

右の諸條件に對し、金が他の何れの金屬にも勝ることは、前項に説くところにより明白で、このため金は貨幣の代表的なものとなつたのである。殊に二七二七年の英國の金本位制を先驅とする世界各國の金本位制確立により、貨幣用としての金の重要性は飛躍的に増大したことは云ふまでもない。

尤もいま世界に於ける文明國の大多數は、金本位制から離脱してゐる。つまり現在は、多數の國に於ては、また我國でも、貨幣としての用途はその本來の職能を停止してゐる。然しながら、金が最も安全性の大きい價值の貯藏であると言ふ信用を持つ限り、金の貨幣職能は依然として喪失されるものではない。最近貨幣學上管理通貨論が行はれてゐるが、後章述べる如く、理論上に止まり實際的に果してそれで良いか全く疑問と云ふの外はない。

のみならず、金は現在國際貸借の決済用として、——即ち商品などによる支

拂勘定の不足を填めてゆく上に於て、大きな役目を果してゐる。その直接の目的は、「爲替相場の維持」にあるは言ふまでもないが、つまりは、金は之を輸出することによつて、外國から必要物資を輸入する上に、最も役立つてゐるのである。戦時下の我國に於ては殊更にさうであることは多言を要しないところで、この點については後章に改めて述べるであらう。

第二章 金の需給

第一 金の需要

金の用途は以上のやうに、貨幣用と工藝美術用とに大別される。ではそれらに、どのくらい割合で需要されるかと言ふに、精確な統計は得られないが、一九三七年（昭和十二年）に於て大体次のやうに推定されてゐる。

（國際決済銀行年次報告による）

新産金額	一、二一九百萬弗
東洋からの現送額	六八
計	一、二八七
内、工藝用に使用されるもの	六一（四・八%）
差引、貨幣用	一、二二六（九五・二%）

即ち一ケ年の金供給増加額のうち、工藝用はその五%弱で、爾余の九五%と

言ふものは貨幣用目的に使用されてゐるのである。

勿論この需要割合は、時代により著しい變遷がある。文化黎明時代の長い期間、金の需要が主として裝飾用にあつたであらうことは容易に想像されるが、その後貨幣が流通されるやうになつて以來、經濟の發展に伴ひ、貨幣目的への使用が次第に増加して來た。殊に、前世紀末頃、世界の主要國に於て相次いで金本位制が採られるに及んで、貨幣に要する金の増大は一層著しかつた。試みに一九二〇年から十年間に於ける一ケ年平均について見れば、この事情は明瞭である。

	貨幣用（退職用を含む）	工藝用	計
自一九二〇年	四七二% (七二%)	一八〇% (二八%)	六五二%
自一九二五年	五七八% (八二%)	二二四% (二八%)	七〇二%
自一九二六年			
自一九二九年			

（渡邊萬次郎氏「金銀讀本」より）

尤も一九三二年九月の英國の金本位制停止をキツカケに、一九三六年の金ブ

ロツク諸國（フランス、オランダ、ギリシヤ、トルコ、スイス等）の金本位拋棄を最後として、オルソドツクスの金本位制を名實共に堅持する資本主義國は全く地を拂つた。これは一見金需要の低下を來す如くであるが、事實は逆である。即ち金本位の離脱により、可變的な市場價格で利用し得るに至つた商品としての金が、その價值を狭い限界内で嚴重に制限されてゐたときよりも、遂に貨幣的職能を増したことは當然であつて、例へば英國が、金本位離脱後、爲替平衡資金を設定して、巨額の金を集積してゐる如く、金の需要は金本位離脱後更に増大してゐるのである。斯くて前表の如く、貨幣用として、新産金と畧々同額の金が年々需要されてゐるのである。

ではこの貨幣用以外の、即ち工藝美術用としての金は、どんな方面にどのぐらゐ使はれてゐるか。世界全體についての精確な統計は得難いが、我國については次のやうな統計がある。

金の非貨幣用消費量

消費別	昭和十一年		昭和十二年(自一月至五月)	
	数量	價值	数量	價值
貴金屬裝飾品	五八三、一五五匁	三三八、二二匁	一一七、二五四	一一七、六六匁
金箔	四二三、四九三	一一七、二五四	一一七、六六匁	一一七、六六匁
金ペン	一九六、一一一	一一七、六六匁	一一七、六六匁	一一七、六六匁
齒科	一六四、一九三	六五、九六五	一一一、七七九	六六、四二四
人絹用ノズル	一六九、五二二	一一一、七七九	一一一、七七九	六六、四二四
時計側鎖	一二九、九八二	六六、四二四	一一一、七七九	六六、四二四
金液	五五、五二七	三六、四九〇	一一一、七七九	六六、四二四
鑛金	二六、〇〇五	九、三六二	一一一、七七九	六六、四二四
其他	六五、二一〇	八五、〇〇五	一一一、七七九	六六、四二四
小口實需	三〇二、八一四	九〇、七五三	一一一、七七九	六六、四二四
計	二、一一二、〇〇二	一、〇九二、八六九	一一一、七七九	六六、四二四

(大田正孝氏「物の經濟」より)

第二金の生産

(イ) 世界金産額

金のことは世界最古の書籍と言はれる舊約聖書創世記第二章に、既に記載されてある。即ちそのエデンの花園中に「その第一の名はヒソンと言ふ。此はハビラの金地を繞るものなり。其地の金は善し」と出てゐる。之を以て見れば、金は人類の始まりと共に知られてゐたものであらう。

然し世界産金の増加が漸く著しくなつたのは、後章述べる如く、一八四九年の発見にかゝるカリフォルニアの産金と、それに續いた濠洲ヴィクトリア洲の産金に依るものである。爾後の産金増加振りは、これらの金山発見後二十年にして、實に十數倍の増産を見たと言ふから凄い。

それから暫く産金の停滯が續いたが、一八八六年に至つて、青化製鍊法の発見により今まで到底利用し得なかつた鑽石からも、金を得られるやうになつたところへ、南阿ではトランスバールの金山が公開され、盛に産金を開始したの

で、産金は以前にも増して飛躍的な増加を開始した。世界大戦の終熄期には、物價高を來し金價は居据りの状態にあつた、ゆゑ、一時産金量は減じたが、近年金價格の引上のため、又もや増勢を辿り今日に至つてゐる。

世界産金高の推移 (國際決済銀行年次報告による)

年次	南アフリカ	ソヴェエト 聯邦(一)	アメリカ (二)	カナダ	其ノ他 生産國	世界 生産	生 産 百 萬 弗
一九三〇	一〇、七二六	一、五〇一	二、二八六	二、一〇三	四、三三八	三〇、九三三	七三三
一九三二	二〇、八七六	一、六五六	二、三九六	二、六九四	四、七〇三	三三、三三六	七八一
一九三三	二、五五九	一、九三八	二、四四九	三、〇四四	五、二六四	二四、二五四	八四九
一九三三	一一、〇一一	二、七〇〇	二、五七七	二、九四九	六、三三六	三五、五五六	八九三
一九三四	一〇、四八〇	三、八五九	二、九二六	二、九七三	六、九五〇	三七、一七六	九五二
一九三五	一〇、七四四	四、五〇〇	三、六一九	三、二八五	七、三三六	二九、五五四	一、〇三四
一九三六	一一、三三六	五、二八〇	四、二九六	三、七四八	八、三三八	三三、九九六	一、一五五
一九三七	一一、七五五	五、〇〇〇	四、七五三	四、〇六六	九、三〇四	三四、八八八	一、三三一
一九三六	三三、一六一	五、〇〇〇	五、〇〇八	四、七二六	九、六六九	三六、八五四	一、三九〇

備考

- (1) ソ聯については公認統計が入手されず、この数字は推算による。
- (2) フイリッピンを含む。
- (3) 金額は純金一オンスにつき三十五弗の現價による。
- (4) 産金量の單位は純金千オンス

世界で最も産金の多いのは、先づ南アフリカで、全世界の三割以上はこ、から出る。次いで、ソヴェート聯邦、アメリカ、カナダの順で、世界の四大産金中心地と言へば、以上の四ヶ國である。

(ロ) 我國産金額

我國に於ても、近年殊に昭和七年以降金の時價買入、金鑛鐵道運賃の引下、鑛山監督局に於ける金鑛分析手数料の低減、金鑛製鍊場の建設助成、中小金山の現地指導等色々の方策を實施して來た結果、産金量は著しく増加した。これを内地だけについて見ても、昭和六年に十二噸餘、價額千六百五十萬圓であつたものが、昭和十一年には二十二噸餘、價額七千四百八十二萬餘圓に増加した

更に之を臺灣、朝鮮等の外地を含めると、昭和六年に約二十二噸、價額二千六百八十四萬圓であつたものが、昭和十一年には四十一噸餘、價額一億二千八百五十六萬餘圓に激増してゐる。然し之を世界各國の産金量から見れば、昭和十一年度に於て、第七位となつてゐる。尙ほ國際決済銀行報告によると、昭和十三年に於て第八位とされてゐる。

我國産金額の推移

昭和	内地	朝鮮	臺灣	計	價格
三年	一〇、三九〇	五、七五二	三、八〇〇	一五、八四二	三〇、七六千圓
四年	一〇、四三三	五、五五二	四、六三二	一六、四三七	三二、三六
五年	一三、〇六七	五、一八六	四、八七	一七、七四一	三三、三五
六年	一三、二七五	九、〇三二	五、五三	二一、八六〇	三六、八四一
七年	一三、四九七	九、七〇〇	八、一七	三三、〇一四	四七、三四五
八年	一三、七七八	一、五〇八	六、五三	二一、八八八	六四、九二七
九年	一五、一四六	三、四三七	一、〇四六	二八、六三〇	八六、八四八

同 十年	一八、三二一	一四、七二〇	一、二五七	三四、八八九	一〇五、三三四
同 十二年	三三、三四	二七、四八九	一、三九四	四二、〇一八	一三六、五五五

國別産金高順位 (昭和十一年)

トランスバール	三五一、五二二	生産高
ロシヤ	二二五、九五七	
北米合衆國	一三三、七〇三	
カナダ	一一五、三三六	
濠洲及新西蘭	五二、〇六〇	
南アメリカ	四六、五〇〇	
日本	四一、〇一九	
日	二六、五九八	
コンゴ及マダガスカル	二四、八四七	
ローデシヤ	二三、四六七	
メキシコ	一六、二一三	
西アフリカ	一一、八七三	
支那		

英領印度	一〇、二九二
中央アメリカ	五、二七〇
東印度	二、〇一五
その他	二六、七五三
計	一、一三三、四二七

昭和十二年以降の我國産金量は發表を差控へられてゐるが、事變勃發以來の金増産政策は著しく積極化してゐるから、十三年、十四年と相當の増産を見てゐるものと思はれる。

尙將來の金生産に關して、海水中から金を回收する計畫のあることも述べて置きたい。「金を海水から？」と一概に笑つてしまへない。從來屢々計畫されたことで、獨逸のハーバーと言ふ博士の如き、海水一吨中に三厘の微量の金も有利に回收し得る方法を案出したと言はれる。然し遺憾ながら、實測によると世界各地の海水中の金は、一吨中僅に最高〇・〇五厘、普通〇・〇一厘以下で

あると言ふ。尤も海水中の金がそんなに微量であるにしても、全世界の海水から金を採れば大したものぢやないか、とも言へるが、残念なことに、今日の採金技術では、そんな微量な金は採れぬらしい。金が近い将来に、滅茶苦茶に安くなる心配は先づない。渡邊萬次郎博士は、金銀讀本に於て、「……それ等は或る程度迄増加した。少くとも、成功したと稱せられる。又最近では海水から三兆弗の大金を、十年間に採り得ると云ふ計畫さへ報ぜられる。だからそれ等の方法で、ただ一匁の金が果して、近い将来經濟界に現はれて來やうか?!」これもこれも所詮は大きな謎であつて、金に對する人類の憧憬——人類に及ぼす金の魅力——それに變化の來らざる限り、人類は果して黄金魔の桎梏を脱し得るであらうか。

この桎梏を多少なりとも今後緩めてくれるものは、果してわれ／＼科學者であらうか?! それこそ經濟學者であらうか?!』と嗟嘆されてゐる。

第三 金の移動

次に前説のやうに産出される金が如何にして移動してゐるか。

移動の原因の第一は、貿易上及び貿易外の諸取引に基く收支關係であり、第二は、政治的並に經濟的不安に依る國際的の資金移動である。つまり、國際收支で受取超過の多い國さか、政治的、經濟的に安定した國さかへは、さうでない國から、金が流れ込むわけである。

この點に於て、金の流入の最も多いのは米國であつて、米國に於ては金の著しい流入から、悪性インフレの起ることを怖れ、流入する金に對して制限したり、課税しやうとする説さへあり、銀行では十億ドル以上も不活動資金として罐詰にしてゐるほどである。金を送らねば爲替の下るおそれのあるわが國から見れば、まるで夢のやうな話である。各國の産金量が假に同等であるとしても支拂超過を續ける國の金は流出して、受取超過を續ける國に吸集されるであら

う。そこへ國により産金量はそれ〴〵相當な違ひがあるのだから、國際間の移動は烈しくなり、金の偏在はごうしても免れないのである。試に各國政府及び中央銀行の金保有高を掲げやう。國際決済銀行報告によれば、昭和十三年末に於てわが國は第十三位となつてゐる。

發券銀行及政府の公表金準備高

(單位百万弗、純金一オンス三五弗替)

ア	メ	リ	カ	一九三六年末	一九三七年末	一九三八年末
				一一、二五八	一二、七六〇	一四、五一二
イ	ギ	リ	ス	二、五八四	二、六八九	二、六九〇
フ	ラ	ン	ス	二、九九五	二、五六四	二、四三五
オ	ラ	ン	ダ	四九〇	九三〇	九九五
ス	キ	ス		六五五	六四八	六九九
ペ	ル	ギ	ー	六三二	五九七	五八一
アル	チ	エン	ティン	五〇一	四六九	四三一
ス	エ	ー	デン	二四〇	二四四	三二一
英	領	印	度	二七五	二七四	二七四

南	ア	フ	リ	カ	二〇三	一八九	二二〇
イ	タ	リ	ア		二〇八	二二〇	一九三
カ	ナ	ダ			一八八	一八四	一九二
日	本				四六三	二六一	一六四
總	計	(其他共)			二一、九〇〇	二三、二五〇	二五、〇〇〇

前表のやうに、アメリカを別論とすれば、オランダ、スミス、カナダ、スエーデン等で微増してゐるほかは、何れもかなり減少しつゝある。つまり金準備を犠牲にして、米國に金を送り、軍擴物資其他を輸入してゐると言ふのが實情である。

第四章 世界産金史概説

第一 世界金發見史

金のここに就ては世界最古の書籍舊約聖書創生記エデンの花園中に、既に記載されてゐること既記の如くである。人類の始まりと同時に金が人類に知られてゐたことを裏書するものである。元來人間に使用された第一の金屬は、金であり、埃及ではピラミットの古墳中に、又我邦でも古墳中から金製品を見出したこともある。鍊金術は實に今日の化學の濫觴を爲すものと云はれてゐる。

歴史に徴するに、古代に於ける最大の金鑛業は埃及に起り、スヒア山中に金を採取した。歐洲一帶は金に乏しい地方であるから、金鑛發見の希望は、印度其他の東洋諸國に求められ、コロンブスの出航となり、現在南北アメリカの間、メキシコの東方の諸島への到着となり、斯くて、此の地方は、第十八世紀

に入るや世界第一の金産地となつた。又其の頃露西亞の東方發展が緒につき、ウラル山地の金山、砂金の發見となり、第十九世紀初頭には蒙古—シベリア境界に於て砂金の發見を見た。

ところが、西曆一八四九年カリフォルニアの東、シエラ・ネヴァダ山中に於て、砂金を發見したことは産金史上未曾有の事件であつた。これはマーシヤルと云ふ製板業者の偶然なる發見に依ると云ふ。即ち彼は水車を設けて製板業をやつてゐた。或る日下流に土砂がたまつて、水車の巡りが悪いので、水車を外し堰を外して、その上流に滯つてゐた水を一時に流して見た。水は非常な勢で流れ、下流の砂も取除かれた跡を見るに、水流の底が洗はれ、キラキラ光るので、手にとると、意外！ 金粒であつたと云ふのである。

其後ヴィクトリア州では、人の夢想せぬ大金塊を發見したので、世界金産額は著るしく増加し、更に一八八六年、青化製鍊法の發達は、從來利用し得な

つた鑽石を採取可能の状態ならしめることとなり、加之、南阿のトランスヴァール
の金山が、盛んに産出し始めたので、世界の産金は又著るしく飛躍的の増
加を見た。第二次世界大戦終熄後には濠洲並に米國西部の金鑛は富鑛地帯の採
盡に依りて一時衰退の傾向が見えたが、大戦中頃から、加奈陀東部、又最近に
は南阿の産金再増加に依つて、再び増加の趨勢に向つた、と云ふのが、世界産
金史のほんの概畧である。

第二 我國金鑛の發見史

我國金鑛の發見は孝徳天皇の御宇、陸奥國小田郡に金を發見したるを以て嚙
矢とす。其産地は現在、宮城縣遠田郡湧谷町附近との事である。造佛材料とし
て金を欲すること大なりし當時に於て、金鑛の發見は大變なものであつた。當
時天皇が如何にお喜び遊ばされたかは、年號を天平感寶と改元され、文武百官
を従へ奈良の東大寺に行幸、一大記念祭を催され國守、金發見者には破格の恩

賞、叙位を賜はつた事實を以ても察知出來やう。又俳聖芭蕉をして、「五月雨
の降り残してや金色堂」なる名吟を残せし金色堂に、今尙残る彼の平泉三代の
文化は、果して何に起因してゐるか、奥羽の豪族藤原氏をして、かくも燦然た
る黄金文明を現出せしめたる最大原因は、北山山地に産出した多量の砂金であ
る。其の居城平泉は實に金澤と稱する砂金地に造營された都である。平泉の文
化は國內は勿論、遠く海外に傳はり、元の朝廷迄聞こえ、偶々元に来てゐたマ
ルコ・ポーロの旅行記に依りて、遙かに歐洲に迄喧傳せられた。それが、忽必
烈をして、前後二回に亘り、我が邊境を窺はしめる原因をつくり、又コロンブ
スをして、西航の決心を懐かしめ、それがやがて新大陸發見の端緒をつくるこ
と、なつた。産金をめぐる運命の數奇と云ふべきであらう。

鎌倉時代から室町時代迄、三百數十年間は、諸侯は遠征資金、賞與、遺贈の爲
めに、金鑛業を保護奨励した。之が故に、金銀山は國土爭奪の目的物となりし

こと、枚擧に遑あらずである。一例を示すと、會津の蘆名氏が伊達氏の爲めに滅亡し、而かも伊達氏が大いに榮え、前田氏の富強も、利家が加賀に至るや、加賀澤村山の金鑛及び能登國寶達山の金鑛を開掘したからである。然し本邦金鑛史を通じて、佐渡金山の發見程に、政治的にも、經濟的にも一大シヨツクを與へたる事實を見出し得ないであらう。佐渡鑛山の發見は、天文十一年（西曆一五四二年）越後の一商人、澤根港に碇泊し、一夜山頂より紫光の發揚を見、初めて鶴子山の金鑛を發見したと傳ふ。其後、慶長六年（西曆一六〇一年）父の割戸に於て鑛脈を發見す。是れが即ち佐渡鑛山の濫觴で、徳川幕府は之を公收することに依りて、幕府の經濟的基礎を築いたのである。蓋し、關ヶ原の大勝、大阪城の落城に依つて、武にあつては天下に敵するものなく、此れと同時に、佐渡からは金銀が泉の如く産出するに至つたからまさに鬼に金棒とは此の事である。ところが發見後、僅かに數十年にして、其の殷賑時代を終つた。そ

こで坑道深く掘鑿するに従ひ、出水の禍に遭ひ、千辛萬苦の末、疏水坑道の開鑿に着手し、全長六百間の大工事を完成した。然し爾來佐渡は、時に應じて盛衰交々至つたと云へるが概して衰微の一路を辿つた。

徳川氏覆滅の原因は、種々の見地から論ぜらるべきであるが、一説には、徳川幕府草創當時、佐渡が餘りに多くの金を産出したるが爲めに、幕府が諸侯に徵税を課さなかつたこと、佐渡金山の衰退に起因し、加之、前後十回に亘る通貨改鑄に依て財政失敗に在ると唱へられてゐるが、まことに首肯すべきであらう。

幕末に於ける遺憾事は世界の新智識に乏しきが爲め、金の大量流出を見た事である。之は今日に至りて之を想ふも誠に遺憾至極の事である。之は安政六年、英、米、蘭、佛、露五ヶ國と締結せる假條約が、金貨と銀貨との關係に就て觸るゝ處がなかつたことから、外商は墨西哥弗を舶載し來り、盛んに之を本邦銀

貨と交換、更らに本邦の金貨と交換し、斯くて得たる金貨は香港に於てメキシコ弗と交換し、更に來りて金貨と交換、莫大なる利を得たのである。如斯して、外人は一航海毎に占むる處の利益は實に十三割に達し、當時本邦金貨の流出するもの、約五千萬兩に達したと云はる。

徳川時代、一の佐渡鑛山の外、有名鑛山の發見なかりしは、鑛山にして餘り有望なるを發見せば、幕府に公收さる、を恐れ、自然探鑛が忽にせられたからである、ところが王政復古と共に、新政府は銳意鑛業の保護獎勵を企圖したる結果、今日有名金山と稱されるもの發見が相次いで行なはれた。鯛生、串木野、鴻ノ舞等本邦中一、二を争ふ金山は皆然りである。之等の有名鑛山の發見に就ては、何れも奇しき挿話があるが、後章に於て説明を加へる處があらう。

第五章 金の出来る迄

第一 金鑛の産狀

金は其存在の量極めて微量で、極めて貴重なものなること、云ふ迄もないが地殻を構成する總ての岩石に含有されてゐる。花崗岩の如き火成岩すら、往々百萬分一の金を含有するものすらあり、砂岩や、大理石の如き水成岩に於ては十億分臺の含有を確かめ得ると云ふ。又海水一匙中には、數十厘に達する金を含有すると云ふことであるから、金の存在は「到處青山あり」とでも謂ふべきであらうか。然し普通一般の火成岩や、水成岩中に含有の金は平均十億分臺であるから、極めて微量である。十億分一乃至九と云へば、千疊敷の座敷を被ふた備後表の全體に對して、その蘭草一本の中、糸と糸との間に挟まれた一節の、更に七分一位の割合であること云ふ。これでは金が如何に貴くとも、其の採

掘は仲々以て算盤に合ふわけのものでない。されば金鑽石の探掘とは、地殻中の局部に集中濃密されてゐる部面、即ち所謂、含金量豊富なる金鑽石を探掘、探掘するに云ふことを意味するに外ならぬ。

我國の金鑛脈は、地質學上、其の構成された年代に依つて、原生代、古生代中生代、新生代（第三紀、第四紀）と云ふ順序となつてゐる。内地では中生代新生代の第三紀、第四紀は到る處に於て存在してゐる。此等の地層と鑛床との關係は大抵の金屬鑛床は、火成岩が地表若くは地表に近く噴出し、熔融状態となつてゐる時、その中に含まれてゐた金屬分が分離して鑛床を作つたものか、又は金屬分に富む岩石のものである。産金鑛床は（イ）古生代の末葉から中生代の始（ロ）中生代中頃から末葉（ハ）第三紀初期に出來たものこの三ツである。朝鮮、臺灣は内地と多少異なるが餘りに専門的に亘るから、茲では割愛して置かう。

兎に角金鑛は概して十萬分臺、百萬分臺で、極く僅かのものであるから、金鑛と云つても實際は金を含んだ他の鑛物の集りと稱する方が適當な位である。金鑛探掘とは地殻中の局部に集中濃密された部分の探掘であるに云ふことは、金鑛山を考へる上に於て、忘れてはならぬ。

然し多數の金鑛中には、金を屢々含むものと、金を殆んど含まないものがある。又同種の鑛物でも、その産狀の如何に依つては、金を含み易いものと、然らざるものがある。然らば金鑛たる望の多い金鑛とはどんなものであるかと云ふと、左の如し。

一、珪酸性金鑛

二、硫化性金鑛

三、テル、性金鑛

- 1. 硫化銅鐵鑛……………黃鐵鑛
- 2. 硫化鐵鑛……………黃銅鑛、磁硫鐵鑛
- 3. 硫化鉛鑛……………方鉛鑛、一、名毒砂
- 4. 硫化亞鉛鑛……………閃亞鐵鑛
- 5. 硫化亞鉛鑛……………閃亞鐵鑛

四、酸化性金礦

ところで、一體金礦はどれ程あれば、鑛石として採掘せられる價值ありやであるが、之は結局鑛脈、製鍊所の位置等に依るものであるが、一匁五圓當時に於てすら、十萬分一以上含有すれば、採算が引合ふたから、金價の二倍以上になつてゐる現在では、百萬分七、八の含有の金鑛でも優に採算が引合ふのである何れ後章に於ても述べるであらうが、金増産の要諦は、採算範圍の金鑛の範圍擴大と云ふことにあると云へやう。

第二、金鑛の採掘

金鑛の採掘は砂金と金鑛床とに依りて異なる。

(一) 砂金の採掘

砂金の採集には、その産出状態、水利の便否に應じて次の如き方法がある。

一、金釣り法

二、揺り鉢法

三、樋流法

四、水壓法

五、砂金浚渫船

金釣法、**揺鉢法**は何れも原始的の方法で、**樋流法**は稍大規模のものである、然るに**水壓法**は砂金の層が高所にある場合は、上流から鐵管にて、水を運び、非常な勢にて砂利に吹きかけ、砂利を崩して流し、途中に於て鐵板に塗れる水銀を以て金粒を採取するのである。**砂金採集船**——ドレッヂャーを使用する場合もあり、河を堰いて沼をつくり、其の中に採集船を入れるのである。

砂金は河、海岸の砂礫の中に、自然に金粒のまま混つてゐるものもある。前者を**川金**、**河砂金**、後者を**濱砂金**と稱する。

砂金は普通、一耗の何分一、何十分一と云ふ小さなものが多い。

(二) 金鑛の採掘

金鑛床の多くは石英脈で、鑛脈上の露頭は、その母岩より風化作用が強いため表面に突出してゐる場合が多い。露出部は風化し、硫化鑛物の如きは溶出して、金はその儘残留してゐるので、其の品位は極めて豊富であるが、概して下部に進むに従ひ、品位は低下するのが普通である。

往昔、採鑛術幼稚の時代に於ては、露頭より手掘にて、數十尺、時としては數百尺迄掘り下げたに止まつたが、排水、通氣、捲揚、運搬の方法が進歩するに従ひ、鑛山の地勢に應じて採鑛は其の適應性に従つて、夫々の方法が行なはれてゐる。

例へば地勢嶮峻なる場合には、露頭より數百尺或は千尺以上下の水準にある山麓地帯より水平に鑛脈に向つて横坑道を掘り進み鑛脈を貫くに至らしめる。之を通洞と稱へる。此の水準以上に各坑道を設け、鑛石を通洞より坑外に搬出

するのである。

地表の勾配緩なる地方に於ては、豎坑を掘下げる。豎坑の上部より普通百尺の水準毎に第一坑道準、第二坑道準と稱して水平坑道を設け、各坑道準より上部の鑛脈を掘り上りつ、鑛石を下段の坑道に落とし、鑛車にて坑道を運搬し豎坑に捲揚げて坑外に搬出するのである。

(三) 金鑛山の術語

金銀鑛脈が発見されると、採掘、試掘の許可を受けて、露頭の追及、地下の探索、品位の調査を終つて、坑道の開鑿に着手せねばならぬ。先づ鑛脈の良好な場合に、下部から坑道を穿つて、水を自然に流し出し、且つ鑛石の下方に運び出す通路とする。此の坑道に二種類あり、一は鑛脈に沿ふて其の内部を水平に近く掘り進むもので、之を鑷押坑道と云ひ、他は鑛脈に直角に之に向つて岩石を貫くもので、之を鑷入坑道或はクロスカットと云ふ。然し地表が平坦に近

いとか、或は海水面に近い時は、鑛脈の近くに、大きな井戸の如き上下に通ずる孔を穿つて、鑛脈に坑道を分ち、機械の力で水や鑛石を引揚げねばならぬ。此の井戸様のものを豎坑と云ふ。鑛脈が緩慢である場合には、鑛脈の傾斜に沿ふて、其の下側の岩石中に上下斜の坑道を穿ち、その各部から鑛脈に向つて坑道を掘る。之を斜坑と云ふ。

斯くして鑛脈に達し、それが採掘し得る程度になれば、左右に掘り進むと共に、上方或は下方に段段に掘り進む。前者を上向階段法、後者を下向階段法と稱す。

採掘するに手掘と發破に依る場合もある。發破とは鑿で細長い孔を穿ち、ダイナマイトを以て爆破することである。又相當大規模な金山では鑿岩機を使用する。

鑛石を掘つてゐる場所を切羽と云ふ。岩石の崩壊を防ぐ爲め、坑道の兩側に

木材を建て、又天井には横に渡して框に組む場合がある。此の木材を支柱と云ふ。

富鑛地帯に當つた時大直利と稱してゐる。

坑道を掘り進むには通風に注意する必要がある。通風よりも更に必要なのは排水である。鑛脈下部に坑道を通じ、坑道、採掘場からの排水に努めねばならぬ。坑道の一部が海水面下にある場合とか、附近の最低地以下に達する場合に、唧筒に依らねばならぬ。之には電力、蒸汽力を要する。

第三、金の製鍊法

金製鍊法の最も原始的なのは、淘汰法である。之は鑛物を碎き、石臼にて擦りつぶし、其の粉を水で淘り分けて、中の金だけを集めたものである。徳川時代には、銀を含むことの多少に依つて、其の製鍊法は異なるが、何れも淘汰法であつた。之に類した方法は世界各地に於て古くは一般に行なはれた。

然し此の方法は、如何に小さく金鑛を粉碎するに雖も、金の非常に小さい微粒は、石英中に含有された儘流出して了ふから、金の大部分を逸し、場合に依つては、全然金を採ることを得ない。ここに於て、最近では青化法其他の方法が行なはれてゐる。金製錬法は乾式法と濕式法とに大別されるが、熔融法は乾式法に屬するが、淘汰法青化法以下の諸方法は何れも濕式法である。左に其の主要なる製錬法を掲げやう。

- (一) 淘汰法……水の力で淘り別ける方法で、之にも種々の改良法がある。
- (二) 混汞法……汞即ち水銀と一緒に鑛石を砕いて金銀を集める方法
- (三) 濾過法……金銀を藥液に溶かして、再び沈澱せしむる方法で、鹽化法と青化法とがあるが、前者は殆んど行なはれない。
- (四) 熔融法……熔融爐又は坩堝の中で鑛石を熔かし、金銀を分離する方法
- (五) 浮游選鑛法

右の内淘汰法を除ける四方法を畧説して見やう。

(一) 混汞法

混汞法とは水銀が金銀と密着するの性を利用して、鑛石の粉末を水にて洗ひ金銀の含有分を濃厚ならしめ、然る後、水銀を注入、攪拌し、金銀の水銀中に吸収されるを待つて、此の水銀のみを流し出し其ものを鞣皮にて搾り金銀を分ち取るの方法である。

此の混汞法にも、歴史的に見て、混汞樽、鍋混汞法、混汞搗鑛法等があるが鑛物處理の方法は次々と著るしく進歩を見、殊に混汞搗鑛法の開始を見るや、舊坑の再開を見るもの多數に及びたるが、此の方法と雖も、盛んに注水して微泥を流し去るが故に、金銀微粒の流出するもの多く、明治卅二年頃より盛大に稼行せし薩摩大口金山の如きは、僅かに八分の金を取り、他は流出せしめて満足せねばならぬ程の不成績であつたと云ふ事である。

(二) 青 化 法

混汞法を以てするも、金鑛中の金は尙微粒のものに至りては、銀の殆んど全部と共に其のまゝ、鑛尾として流出するのを防ぐ方法として、今から約五十數年前マツクアーサー、フォレットなる二人に依つて發見された方法である。青化加里の水溶液を用ゐるもので、此の水溶液の中に溶けたる金銀含有液を分けこつて、亞鉛屑を入れて置くに、亞鉛が溶解、金、銀が沈澱する。之を取り出して亞鉛を稀硫酸で溶かし、或は爐の中で焼き残れる金銀を融かし集めるのである。此の方法は始め南阿の金山で用ひられ、其後盛んに各金山に於て應用せられた。此の發見のあつた一八九一年より十年間に於て、世界金産額は約倍額に更に次の十年間に於て倍に激増したと云ふ事である。右の如き増加は、實に此の發明に依る偉功と云はねばならぬ。此の青化法は我國に於ては、最初、當時日の出の勢の牛尾大口兩金山、肥前の波佐見金山に應用されて好成績をあげた

るを以て、各地の金山皆此の方法を用ひたと云ふことである。

青化法を用ひる際、砂と泥とを別々に分け、砂はそのまま、非常に大きな槽に盛り、青化加里液をその上から加へて、暫らくの後、蓆を敷いた底から之を抜き出し、其後は一層薄い液で、更に數日間この處理を續けるが、泥はそれでは充分藥液に混らぬから、圓筒形の樽に入れ、其の下から空氣を送つて、藥液と共に攪拌する。此の方法では金は五時間位にて充分であり、時間さへ長くすれば、硫化銀にも充分有効に作用するので、其の後此の液を濾し取つて、此れに亞鉛屑を入れ、その中の金銀をこるのである。此の方法を總泥法又は泥鑛法(オール、スライミング法)と云はれ、大分縣鯛生とかの大金山で主として用ゐられてゐる。此の泥鑛法にありては碎鑛より攪拌し、濾過し、沈澱し、金泥を試金室迄輸送する等全部は機械的にして、一切人手を觸る、ここなきを以て、一切の盜難から免かれ得る長所がある。

(三) 鍍融法

青化法は實に金製鍊史上劃紀的方法であつたが、鑛石中に硫化物、殊に硫化アンチモニー等を含む場合に於ては、青化液の強度を減少する懼れがある。それで鑛石を銅の熔鑛爐中に熔融するときは、金は全部銅中に熔解され、少しも鍍の中に流出することはないから採取率一〇〇%である。銅に吸収せられたる金銀は電氣精銅法に依りて完全に分離し得ない。尙熔融法に依るときは金鑛中の石英は、銅鑛中の鐵其他の金屬と化合して鍍を作るの作用として働らくのである。

(四) 浮游選鑛法

青化法に依るときは、金銀以外の不純分例へば硫化物、テルル化物、砒化物等があるから、青化液に入れる前に、淘汰盤に依つて除去し、或は油選鑛又は浮游選鑛法を用ゐて之等を分離する。(其の殘物に青化法を施すのであるが、

分離した硫化物は此の熔融法にて處理される。) 淘汰盤に依る場合は軽い砂泥と重き硫化物との分離を行ふもので、比重選鑛と稱されてゐるが、多くの場合此れに依つて得た硫化鑛は含金品位が高い。油選鑛又は浮游選鑛法とは、微細末に碎いた砂泥を微量の松脂油及ザンテートと稱する特殊藥品と混合して浮游選鑛機に供給すること、砂泥は強く回轉する羽にて水中に於て攪拌され、硫化物は樹脂油と藥品の作用に依りて生ずる泡の中に吸収され泡と共に浮游してくる。浮び上つた泡はオーバー・フローして機械から流出するのを捕集する。此の方法は現在では硫化鑛のみならず、珪酸質金鑛にも應用されてゐる。

硫化鐵を除去した含金砂泥は、水と共に一度砂鑛沈澱槽に注入させるか、又は分粒機と稱する装置を通過させて砂鑛を沈降せしめる。斯くて砂泥は其粒の大きさに依り砂と泥との二種類に大別されるが、前者は砂鑛青化法、後者は泥鑛青化法に依り各別に製鍊せられる。此の方法に依るときは貧鑛も化して富鑛

と爲すことを得る。

銅製鍊所に於ては、金鑛の殺到する爲め、自山に於て製鍊せんとするも設備なく、而かも附近の製鍊所へ金鑛の運搬不便なる場合に於ては勢、容積を少くして、含金率を高めて銅製鍊所へ送らざるを得ない。浮游選鑛の必要は茲に在る。尙此の方法に適する金鑛は、主として黄鐵鑛を多量に、含有するの鑛物で普通の硅酸鐵に適應しないが、近年研究が積まれるに従ひ、此の方法に依るものが益々隆盛である。

第四、賣鑛と自山製鍊

採鑛した鑛山にての自山製鍊と、他鑛山又は製鍊所へ賣鑛する場合とがある。製鍊法が進歩すると共に、手法又は設備が大規模になると共に到底小鑛山の克く爲す處でなく、勢賣鑛を爲さざるを得ない。又大鑛山又は獨立製鍊所にて

も銅、又は鉛製鍊上から云ふ珪酸質の金銀鑛を加へることが必要なのである。

我國では、自山製鍊法をしてゐるのは、大分縣鯛生及び北海道、鴻舞、新潟縣佐渡、鹿兒島縣串木野、山ヶ野に限られ、福島縣高玉、宮城縣大谷、静岡縣土肥、持越、臺灣金爪石の如き鑛山すら、日立、別子、四坂島、佐賀關へ賣鑛してゐる。自鑛山の鑛石を以て足らず、買鑛製鍊してゐるのは、茨城縣日立、愛媛縣別子、秋田縣小坂、尾去澤、栃木縣足尾等の大銅山並に大分縣佐賀關、香川縣直島等の獨立製鍊所である。

第五、産金技術の進歩

探鑛、採鑛、選鑛、製鍊及び副産物回収と、産金技術の進歩は、洵に驚異的の發達を見てゐる。以下順次簡単に紹介して見やう。

(イ) 探 鑛

探鑛法に就ては、本邦固有の上總掘、試錐法から、金剛石試錐法なる方法が

鋼生、釜石、足尾等に應用され偉功を奏した。坑内に於ける採鑛法は坑道掘進に依る方法が、最も一般的且つ確實なる方法である。鑿岩機の發達に伴ひ、掘進の速度も著るしく増加した。有望なる鑛區の發見も、此の坑道法に負ふ處多しと云ふことである。

(ロ) 採 鑛

鑿岩機の發達は、從來の上向、下向階段法から、切上り、切下り掘進が容易となつたので、採鑛法に革命を起した。

鑿岩機の發達に伴ひ、鋼生等の著名鑛山では、手掘を全廢するに至つた。鑿岩機一臺當掘鑿量は、坑道掘進二乃至五立方米、採鑛にて四乃至七立方米で、手掘の一乃至三立方米に比し格段の相異があること云ふ。使用人數に於て一臺二人が、一臺一人にて足る様になつた。

(ハ) 選 鑛

選鑛方法に就ても非常な進歩を見てゐる。即ち大正初年の比重選鑛法から大正四、五年頃には、浮遊選鑛法が行なはるゝ事となつた。之を契機に、各鑛山之に做つたが、尙比重と浮遊選鑛は互に其の適應性に伴ひて利用されてゐた。昭和二、三年頃に入りて、優先浮遊選鑛法が勃興した。優先浮遊選鑛とは石英に二種以上の硫化金屬を別々に分離する方法である。昭和五年以後には、含金銀硫化鑛乃至石英質金鑛に對しても實施し、又泥鑛青化法の代りに浮遊選鑛法を試用して好結果を收めた。

(ニ) 製鍊法の進歩

明治晩年混汞法に代り勃興した青化製鍊法は各方面に於て採用、其の技術の進歩も著るしく、泥鑛微細度の高度化に依る金銀採取率の向上である。金銀の熔解及沈澱に關する技術も亦顯著なるものがある。各種金銀鑛を併用し、金銀を粗銅中に收集する乾式製鍊法は大正以後隆盛となつた。今日では銅鑛の溶劑

としての金鑛、金鑛の媒溶劑としての銅鑛が使用される。然し銅の増産が困難なる現狀に於ては、珪酸鑛浮遊選鑛法、青化製鍊設備の充實を必要とするこゝを俟たないのである。

電氣精金法の普及、進歩も極めて顯著なるものがある。電氣精金法は純金品位を九九・三乃至九九・八か、九九・九七以上に高めるに至つた。

(ホ) 副産物回収

副産物の回収及廢鍍の再處理の進歩も著るしい。優先浮遊選鑛法に依りて硫化鐵を産出するに至つた事は、既述の通りであるが、大正の央頃コツトレル收塵法の實施を見て、各種副産物の回収を見るに至つた。最近では電氣精金の澱物から、白石イリチウム、パラチウム等、電氣精銅の澱物から、蒼鉛、セレニウム等の回収を行つてゐる。又銅製廢瓦スより硫酸を製造する方法は近年に至りて行なはれる處である。

第六章 戦時經濟下の金問題

第一 金動員の重要性

我國經濟の現狀では、金の増産と集中とが、最も緊喫な問題であることは序説に於て述べた通りである。其の必要性は端的に言へば、輸入力の増大が當面緊急の問題であるに拘らず、輸出の前途が必ずしも樂觀を許さない——従つて海外からの輸入資金である金が、ますます必要となるわけである。以下に暫く金動員の必要性を多少重複する處があるが考究して見やう。

(イ) 輸入力増進の必要

戦争をするためには、非常な物の消耗が伴ふことは今更茲に言ふまでもない殊に航空機、火焰戦車などの兵器の發達著しく、また戦争の形態が著しく大規模且複雑となつた今日の戦争に於ては、物の消耗は驚くべく大なるものがある

つまり近代戦の遂行のためには、物のもつ役割が質的にも量的にも、頗る重要なものとなるのである。

支那事變勃發以來第四年目を迎へた我國では、今後尙蔣政權の膺懲と、聖戦の目的たる新東亞建設に向つて、長期体勢の下に國の總力を傾注せねばならぬこと、既に何人も周知のところである。即ち我國に於ては、一面膺懲、他面建設を長期に亘つて遂行せねばならぬ。従つて今日我國に於ける物資の需要は著しく増大してゐるのであつて、之を我國の物資供給力に照して見るに、之が補給は寔に容易ならぬものがある。政府に於て物資動員計畫を樹て、物資の供給を時局緊急事業と不急事業との間に先後を設けるかたはら、日滿支を一體とする大規模な生産力擴充計畫によつて、物資供給力の増大を圖つてゐるのは、これがためである。

然しながら、現在の資源開發狀況では、軍需資材又は生産力擴充に必要な物

資を、すべて自給するわけに行かない。なほ相當な物資をどうしても外國からの輸入に俟たねばならぬのである。この場合、他面に於て自國の輸出力が旺盛であれば、之によつて外國爲替を獲得し、海外からの物資購入資金に充てること出来るのであつて、今日大多數の國はこの方法を通例としてゐる。

(ロ) 輸出の前途多難

ところで翻つてわが輸出の現況はどうかであらうか。

昨昭和十四年度のわが國の貿易狀況を概観するに、輸出總額に於て三十五億七千六百萬圓、輸入總額に於て二十九億一千七百萬圓で、差引六億五千八百萬圓の出超であつた。ところが之は所謂圓ブロック、つまり滿洲、關東州、支那を含めたものである。外貨の獲得と言ふ見地から見れば、圓ブロックを除いて考へねばならぬ。では圓ブロック以外の所謂第三國の輸出状態はどうか、と言ふにそれは必ずしも樂觀を許さぬものがある。例へば昭和十四年度に於ては、

輸出十七億七千七百萬圓に對し、輸入は二十二億三千三百萬圓にして、前年より相當の改善を見たとは言へ、なほ四億五千六百萬圓からの輸入超過に終つてゐる。

輸出入額累年比較 (單位百萬圓)

昭和	總額		差
	輸 入	輸 出	
一一年	二、七六三	二、六九二	七〇引
一二年	三、七八三	三、一七五	六〇七
一三年	二、六六三	二、六八九	二六
一四年	二、九一七	三、五七六	六五八

○ 圓ブロック向

昭和	輸 入	輸 出	差
一一年	三九七	七一六	三一九
一二年	四四七	八四九	三九七
一三年	五六五	一、一八二	六一六
一四年	六八三	一、七七七	一、〇九三

○ 第三國向

昭和	輸 入	輸 出	差
一一年	一、三六六	一、九七六	三八九
一二年	三、三三九	二、三三四	一、〇〇五
一三年	二、〇九七	一、五〇七	五九〇
一四年	二、三三三	一、七七七	四五六

偶々十四年九月初めに第二次歐洲戰亂が勃發した。之は理屈通りならば、わが輸出貿易にとつて絶好の機會ではある。即ち假に歐洲戰亂が長期に亘るものとすれば、交戦諸國の輸出餘力が縮減されることは、それだけわが輸出の増進すべきを期待されるのである。

然しながら實狀はどうかと言ふに、わが國自體が、今日、事變の完遂、新東亞の經濟建設、國防の高度化等に著しく多量の物資並に勞力を必要としてゐるため、輸出に注ぎ得る經濟力は相當の制約を受けてゐる。而も交戦國を中心とする物資需要の急激な増大によりては、海外に於ける原材料の値上りも亦尠か

らぬものがある。また諸外國の多くは各種の輸入制限を實施してゐる。従つて歐洲の戦亂を以て直にわが輸出貿易に對する樂觀材料となし得ないことは、明白であらう。第三國貿易の前途は仲々に多難を豫想されるのである。

(ハ) 金動員の緊要

右に述べたやうに、物資需要の急速な増大から、輸入力の擴大は是非とも必要であるのに、その資金の源泉となる第三國貿易の前途を、餘り樂觀し難いとするれば、海外からの物資購入資金を何によつて賄ふか。そのためには金の増産と集中に全力を注ぐ外あるまい。現在の國際情勢では外國資金の借入が殆ど不可能だからである。

即ち、外國よりの物資買入がすべて金で決済される今日、ごんな必要な物でも調達出来る金の、増産及び集中は、實に戦争目的完遂と何等選ばぬわが國最大の課題であると言へやう。

第二 正貨準備としての金

金の貨幣的側面——貨幣としての金の職能が、最近非常に輕視されつゝ、ある傾向にある。それは次説の最近の金準備の機能の變遷を顧れば明白であらうが然しそれにも拘らず金の重要性は少しも失はれるものではないと思はれる。

先づ金本位施行以來の國內通貨と金準備との關係を見るに、金本位制施行中に於ても、既に金の主たる效用が、國內通貨發行の準備ではなくなりつゝ、あつた。蓋し、一般大衆が兌換券の使用に便宜を感じるに隨ひ、國內需要のための兌換——即ち金準備の使用は極く稀となり、金準備は寧ろ國際收支の均衡破調に備へる必要が大となつた。金本位制の施行中でさへ既にこのやうであつたから、その離脱後に於ては國內通貨の發行準備としての金の重要性はますます減少した。即ち通貨の發行がどれだけ多額となつても、兌換の請求に應ずる金準備の保有は必要ないのである。現に、我國及び主要國の發券制度の發展經過を

見ても、近時保證準備の重要性が増加し、銀行券數量の伸縮は正貨準備發行の部分よりも、寧ろ保證準備發行の部分によつて行はれる傾向が著しく強化されてゐる。そこで、この點を重視する論者には、統制經濟下にあつて通貨が管理されること、國內關係に於て金は全く不用なのだから、すべて現送して外國からの物資購入に充つべきだと極言するものもある。

然しながら、之は余りに理論に偏した見方ではないだらうか。固より金本位制を離れてゐる限り、外國より緊急切要の物資購入の必要がある場合は、金の使用を回避すべきではないことは言ふまでもない。だが金準備を全く無用と斷じてしまふ前に、次の事情を考慮せねばなるまい。

即ちそれは、金を尊重する觀念が、通貨と金を結びつける濃厚な潜在意識となつてゐることである。金本位制離脱下にあつて貨幣の價值を以て、貨幣に包含される金の地金とか、或は之が準備として保有される金の地金の價值によ

つて決定せられるこの見解の當否に就ては暫く別として、實際問題として金に對する一般人情を無視するわけには行くまい。即ち金本位制を離脱し、金地金の價格も爲替相場も不動のものでないことが感知されるに至つては、通貨に對する信用を維持する方法が必要とされるのであるが、この場合、金と通貨の連絡を保持することが最も有効な手段である。即ち兌換による實際の連絡は絶たれても、通貨發行の基礎としての金準備の重要性は依然失はれることはないのである。

而も金は國際支拂決済手段として比類のない性格を認められてゐる。即ち金本位制下にあつては勿論、その離脱下にあつても、金の受入れを拒む國のない限り、最も便利にして有効なる國際決済手段である。假に金準備にして涸渴せんか、輸入は輸出の限度内にこぢ込められねばならず、敢へてその制限を犯せば、爲替相場の下落は必然である。爲替の下落が低物價政策の有力な阻因たる

は言ふまでもない。かくて爲替相場の維持、若しくは輸入力の増進のため、國際通貨としての金の役割は、金本位制離脱後と雖も、依然として重要なのである。

要するに、貨幣用としての金の職能は、管理通貨制度の今日では、かなり變化しつゝあるが、それにしても幣制上に於ける金の力は依然減却することは出來ず、たゞ最近では爲替相場の維持と言ふ目的に重點が置かれてゐるに過ぎないのである。而してこの傾向が目下のわが戦時經濟に於て、格別に強められつつあること、前章以來、強調するが如くである。金本位制を離脱せる國家と雖も好んで金の保有を不必要と考へたのではなく、止むを得ざるの狀態に依つて金準備の減少を來たしたが爲めである。

第三、我國金政策の發展

上述するやうに、金の重要性は、戦時下の我國に於て著しく増大しつゝ、あり

戦時の經濟諸對策は金政策にその焦點が置かれてゐると言つても過言ではあるまい。然らば近年我國ではどのやうな金政策が採られてゐるか。昭和六年金輸出再禁止後に於けるその發展過程を眺めやう。

(イ) 再禁止後の金政策

金輸出再禁止後のわが金政策は、勿論客觀情勢の變化に對應して、その目標も異つて來てゐるが、大雑把に言つて三つの階段に區分出來る。その第一期は金の時價買上を開始した昭和七年三月七日から、日本銀行金買入法が實施されるに至つた昭和九年四月まで、第二期は日銀金買入法の實施から第一回の金現送を始めた昭和十二年三月四日に至る期間であり、第三期はそれ以降現在に至るまで、ある。

先づ第一期をみるに、これは政府で金を時價で買上げて、海外に現送し、政府の海外拂に充てられた期間と言へる。何故金の時價買入が開始されたかと言

ふに、金再禁以來金地金の市中相場は漸騰の趨勢を示したに拘らず、日銀の買入価格は貨幣法所定通り一匁につき五圓であつた、め、海外への密輸出が盛んに行はれたからである。その買入価格は、買入開始の昭和七年三月中の市中地金相場——最高七圓五十錢、最低六圓七十錢、平均七圓二十三錢九厘——に對し七圓二十四錢五厘であつた。價格の算定は、金ドルが基準で、之を圓價に換算したものに對し、現送費及リスクとして二割のマーヂンを置かれたのである。ではかうして買上られた金が大部分海外へ現送されたのは何故かと言へば、當時の金買上政策が圓貨維持と言ふ點を眼目としてゐたがためである。

然しこの金現送は、昭和九年四月の金買入法の實施によつて打切られた。即ち金政策は第二期へ轉換したのである。この期間には、専ら國內に金を保有することを以て金買入の目的とされた。政策の轉換は客觀情勢の變化に即するもので、即ち、滿洲事變を契機とする國防強化、滿洲國經濟建設等に備へて、日

銀保證準備を從來の一億二千萬圓より一舉十億圓にまで擴張した、め、正貨準備の低下を防ぐ必要が生じたのである。

(ロ) 金買入法の制定

昭和九年に制定された金買入法は、要するに金準備の増大と産金獎勵を表面の目的とし、以て内面では國內に於けるインフレーションの發展に備へる意味のものであつた。

本法實施當初の買入價格は、一匁につき十一圓六錢と定められた。——當時即ち九年四月中の市中金地金相場は最高十三圓、最低十二圓七十錢、平均十二圓七十五錢であつた——算定の基準はロンドン金塊相場に置き、從來同様二割のマーヂンを設けられたのである。

この買入價格は昭和九年中は釘付けられてゐたが、他方でロンドンの金塊相場が漸次暴騰した、め、遂に昭和十年一月に十一圓五十八錢(五十二錢五厘上

げ)越えて十一年五月には十三圓十二錢(一圓五十四錢五厘上げ)に引上げられた。これで當時のロンドン相場に比しマージンは約一割に狭められた。

(ハ) 金現送と金買上價格引上

右の如く金買入法の制定により、金政策は、金準備の蓄積に主目的が置かれて来たのであるが、これは昭和十二年初期以降、わが經濟機構が所謂準戰時體制へ移行し、生産力擴充の必要が大なるに伴ひ、金政策にも當然積極的な轉換が必要となつた。と言ふのは、國防充實、生産力の擴充のためには、輸入の増加が不可避であるから、それが爲替相場を下押しすることを防がねばならぬからである。

金政策の積極轉換は先づ、昭和十二年三月結城藏相によつて行はれた金現送に求められる。即ち政府では同年三月爲替管理の強化を実施すると共に、金買入法制定當時保有せる時價約五千萬圓の金を現送する旨を發表した。七月以降

の金現送額の數字は發表を停止されたが、三月の現送開始から七月に至るまでも數回に亘り現送は續いてゐる。即ち同期間の現送金は八四、二七九疋、時價換算三億二千八百萬圓に上つたのである。而して昭和十二年度中の現送額は池田藏相の演説(昭和十三年十二月六日、於關西銀行大會)により八億六千萬圓と示され、また十三年度中が、六億六千萬圓であつたことが明にされたことから見て、十四年度あたり、貿易尻の改善があつたことは言へ、なほ相當の金現送が行はれてゐるものと推察されやう。

ともかくも、金の保有主義から現送方針へ轉換したのだから、金は多ければ多いほどよい。従つて現送の開始と共に買上値の引上も行はれた。即ち、昭和十二年五月、一匁十四圓十三錢七厘五毛と壹圓餘の引上が行はれ、更に十三年四月には滿洲國の引上に對應して、同國と同値の十四圓四十三錢七厘五毛に引上げられた。この引上に於て注目すべき點が二つある。一は買上價格算定の基

礎が、従来のロンドン金塊相場からアメリカの金買上価格——オンス三十五弗——へ變更されたことで、他の一つは、今次の引上によつて海外市價との間にマーヂンが縮少されたことである。

金買上價格の推移(單位圓)

昭和	年	月	日	一瓦ニ付キ	一匁ニ付キ
昭和	七	三	七	一・九三二	七・二四五
同	同	四	四	一・九一五	七・一八一
同	同	五	二	一・九六五	七・三六八
同	同	六	二〇	一・九九二	七・四六九
同	同	七	一八	二・〇六四	七・七三九
同	同	八	二九	二・二五六	八・四六〇
同	同	九	一九	二・三一五	八・六八〇
同	同	一〇	一八	二・二八三	八・五六一
同	同	一〇	二九	二・四四九	九・三七一
同	同	一〇	二六	二・五一七	九・四三八

同	八	一	三一	二・四四九	九・三七一
同	同	二	二〇	二・四七七	九・二八八
同	同	三	二七	二・四六七	九・二五一
同	同	四	二四	二・三六八	八・八八〇
同	同	六	二二	二・三七〇	八・八八八
同	同	十一	二四	二・六五〇	九・九三八
同	同	九	四・七	二・九五〇	一一・〇六三
同	同	十	一・二一	三・〇九〇	一一・五八八
同	同	十一	五・六	三・五〇〇	一三・一二五
同	同	十二	五・一五	三・七七〇	一四・一三七五
同	同	十三	四・三〇	三・八五〇	一四・四三七五

(註) 一匁は三・七五瓦

(二) 産金法の制定

對外決濟力を増強するため、金の現送開始に次いで行はれたのは、昭和十二年八月公布された産金法の制定である。同法は國內産金を國家の統制下に置か

んとするもので、日銀金買入法の段階より、國家管理の色彩は一段と濃化された。その要點を摘記すれば、次のやうである。

- (1) 含金礦物を取得したる者は必らず之を金地金に製鍊して政府に賣却し、又は政府の免許せる買礦業者に賣礦すること
- (2) 金製鍊業及金礦物買礦業を政府の免許事業とすること
- (3) 政府は必要により探礦、採礦、選礦、製鍊につき設備の新設、擴張、改良、其他必要な事業を命じ得ること
- (4) 政府は金の價格又は金の使用制限其他金の使用に關し命令を發し、且金貨幣、金地金、金の合金、又は金を主たる材料とする物の取得、處分、保有に關し報告を徴し検査を爲し得ること
- (5) 以上命令は金委員會の議を経るを要す
- (6) 政府は金礦業者及金製鍊業者に對し、獎勵金を交附することを得
- (7) 産金業のため必要な器具機械其他の材料を政府の認可を受けて輸入す

るときは本法施行後五年間輸入税を免許す

即ち、その要旨とするところは、一、産金の強制買上、二、産金事業の管理

三、産金事業の助成、四、金消費の節約

の四點である。なほ産金法の制定に伴ひ、金は政府が直接買入れることになつたので、日銀金買入法は廢止されることになつた。

然らば産金法制定によりどの程度の増産が豫定されたのであるか。昭和十二年に樹立された産金五ヶ年計畫の内容は、今日では其の詳細を報告するを得ないが、何れにしても相當大規模のものである。

産金五箇年計畫

新規施設に依る増産	數量	金	數量	金	數量	金	
	千兩						千兩
既設製鍊場の産出	數量	金	數量	金	數量	金	
	千兩						千兩
合計						數量	金
						千兩	千兩

昭和十一年
十二年

十三年
十四年
十五年
十六年
十七年

之は内地のみの豫定であるが、外地に於ても略々同様の増産計畫を樹て、五ヶ年後の昭和十七年産金は、内地五十六吨、外地七十五吨、合計百三十一吨が目標となつてゐるのである。労働力の不足、設備資材の供給不圓滑等の困難は加つて來たが、以下に述べるやうにその後諸種の積極増産策が採られてゐるから、右の目標に向つて着々実績を收めてゐるものと思はれる。

(ホ) 金準備評價替と金資金特別會計の設定

以上のやうにして産金の増産獎勵が行はれると共に、他方、金の評價替、即

ち一定の金についての値ぶみに對し、暫定的な改正が行はれた。金準備評價法がそれである。さうしてこれによつて生れる評價益を以て金資金特別會計が設定された。これと同時に鮮銀、臺銀兩行の保有にかゝる金貨及金地金は日銀へ引渡し、兩行の正貨準備は日本銀行券を以て代へることとなつた。金準備評價法と金資金特別會計の要旨とするところは次の如くである。

(1) 日銀、鮮銀及臺銀の金準備を、當分のうち、二九〇ミリグラムにつき一圓の割合（一匁十二圓九十三錢一厘）にて評價替（從來七百五十ミリグラムが一圓——一匁五圓）を行ひ、金準備はすべて日銀へ集中保有する。

(2) 評價の際に於ける金準備を、日銀分四億五千萬圓、鮮銀分五百十九萬八千圓、臺銀分千五百八十八萬五千圓として計算すれば、三行を合した新評價額は約十二億一千四百萬圓となりその評價益は約九億九千五百萬圓であるが、この評價益より日銀の政府に對する法定貸上金二千二百萬圓及び日銀金買入

法による政府の債務二億二千六百萬圓、計二億四千八百萬圓を差引く結果、
 殘額七億四千七百萬圓が政府に納付される。

(3) この納付金が金資金特別會計の活動資金である。(次表参照)但し、日銀の
 發券準備として八億圓を殘す。従つて金資金特別會計は結局四億一千三百萬
 圓を金で保有し、殘額三億三千四百萬圓は日銀に於ける預金となる。

金資金特別會計總資金

(一) (イ) 日本銀行より納付すべき金額

(單位圓)

金準備評價法に依り納付すべき金額

六七四、二五四、六一〇

日本銀行金買入法に依り納付すべき金額

二九一、三八六、九二二

計

九六五、六四一、五三二

(ロ) 日本銀行に償還すべき債務

日本銀行金買入法に依る債務

二二六、一二六、五九七

兌換券條例に依る債務

計

二二、〇〇〇、〇〇〇

二四八、一二六、五九七

七一七、五一四、九三五

(ハ) 差 引

四、五三七、一四九

(ニ) 朝鮮銀行より納付すべき利益

二五、一九七、三〇一

(三) 臺灣銀行より納付すべき利益

七四七、二四九、三八五

合計(資金總額)

(4) 而して金資金特別會計は、その保有する金を現送して在外資金を補充する

こと、もに、五千萬圓を限り産金奨勵、及び國債買入にも運用することが出来る。更に其後運用の範圍は擴張されて、産金振興債券、日本産金株式會社株式、銀、外貨、日本産金振興株式會社への貸付金、大藏省預金部への預金にも適用される途が拓かれた。

因みに、右の日銀發券準備は實際は八億一千萬圓と殘されたが、昭和十三年

七月十九日に至り、そのうち三億圓を解除し、之を以て同行に外國爲替基金勘定を設置し、輸出商品の原料輸入のために利用せしめられること、なつた。

以上の如く金資金特別會計の設置により爲替調節の操作は、日銀の諸勘定とは分離して行はれ、而も運用狀況は外部に發表されないから、金準備の變動による市場への刺戟を避け、適宜の措置を講じ得ること、なる。

第七章 本邦産金事業

第一、内地の産金事業

本邦に於ける産金の歴史は、前に述べたる如く、可なり古いものであるが、明治以前の産金量は僅少に過ぎなかつたものと思はれる。産金量が統計上數字として明白になつたのは、商工省鑛山局調査にかゝる明治十年以降のものが始めて、之に依ると内地産金高は次の如き推移を辿つてゐる。

年	數量	價格
明治十年	三五〇疋	二三三千元
同二十年	五二〇	三六七
同三十年	一、〇三六	一、一九八
同四十年	二、九〇一	三、八六八
大正元年	五、一五〇	六、七九九
同五年	七、八九一	一〇、四一二
同十年	七、三七四	九、七一九

昭和元年	同二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年	同八年	同九年	同十年	同十一年
九、〇九八	九、六〇六	一〇、三九〇	一〇、四二二	一二、〇六七	一二、二七五	一二、四九七	一三、七二八	一五、一四六	一八、三二一	二一、九五三
一二、七六七	一三、一七〇	一四、六八五	一四、七六四	一六、一二〇	一六、五三二	二五、九七二	二三、八四六	四五、〇四一	五六、三〇九	七三、六二五

(註) 昭和十一年産全數量及價格は商工省推算に依る。十二年以降は發表されず。

即ち明治十年の産額は三三五〇匁に過ぎなかつたが、二十年には五二〇匁、三十年一、〇〇〇匁、四十年三、〇〇〇匁と云ふ具合に急激に増産し、大正年間には七、〇〇〇匁を超え、昭和元年には九、〇〇〇匁となり、昭和十一年には

二二、〇〇〇匁となつた。昭和元年以降の産金増加状況を見ると、昭和六年迄は平均一年五百三十匁の増産で、其の増加率は五・八%であるが、金輸出再禁止後から昭和十一年迄は平均一千九百四十匁の増産で、其の増加率は十五・八%である。即ち、金輸出再禁止後の増産が顯著なることを知るのである。

但し、こゝに云ふ内地の産金は、必ずしも内地の鑛山で採掘した鑛石から取つた金を意味するのではなく、たゞ内地の製鍊所から産出した金を意味するものであり、現に昭和十年には朝鮮から五萬八千匁(價格六百五十萬圓)、臺灣から十萬匁(價格六百三十萬圓)の金銀銅鑛が移入され、内地産金額の増加に資してゐるのである。

産金に關聯して述べなければならぬのは、銀及び銅の産額であるが、銀は近年金の増産に伴ひ、且つ米國の銀政策に基く銀價の昂騰に刺戟されて著しく増産した。即ち大正元年以降昭和七年迄の産銀額は歐洲大戰の最好況時を除くこ

きは、多くとも十六萬瓩内外であつたが、昭和八年以降目立つて増産し、十一年には重要鑛山産銀額は三十萬瓩内外に垂んとするに至つた。

銅は大正元年以降、昭和三年頃迄は大戦當時の最好況時を除くと、六萬瓩内外の産出を見てゐたが、昭和四、五、六年の不況時には鋭意増産を計り、多額の輸出に依り難局を打開した。その後爲替相場の下落と外銅高に恵まれて好況に轉ずるや、其の産額を七萬瓩以下に減じて堅實なる經營方法を講じ、敢へて輸入を拒否せざる態度を取つてゐたが、其の後需要の増加に伴ふ製鍊所の増加等ありて、産額は漸次向上線を辿るに至つた。

産金量が前述の如く近時著しく増加したのは、金輸出再禁止以降金の買入價格が漸次引き上げられ、産金の採算が良化したからである。

我國の金相場は貨幣法上、一匁(三・七五瓦)金五圓である事は申す迄もない。處が昭和六年十二月十三日犬養内閣に依つて金輸出の再禁止が斷行され、

續いて同月十七日兌換停止を實施した。それ以來、我が金相場は對外爲替相場に支配せらるゝことゝなつた。最初日銀の金買入値段は金ドルを基準としたものであつたが、昭和八年十一月から日英爲替及び倫敦金塊相場を基準とすることに改め、更に十三年五月より米國政府の買入値段を基礎とすることゝした。然るに、金塊相場は世界的に昂騰を見るに至り、其の結果日銀の買入値段も年々引き上げられて居る。次に再禁止後日銀買入値段の年々の平均を見るに次の如き騰勢を辿つてゐる。

昭和	七年	八年	九年	十年	十一年	十二年
	二・一三三	二・四五一	二・八七一	三・〇九〇	三・三五八	三・六七八

(一瓦ニツキ)

同 十三年
同 十四年
同 十五年

三・八二三
三・八五〇
三・八五〇

即ち昭和六年金再禁止前の一瓦の金価格は一圓三十三錢三厘であつたが、八年には二圓四十五錢、九年二圓八十七錢と上進、十年には三圓臺となり、其後數次の引き上げを見、十三年五月三圓八十五錢に引き上げられて今日に至つて居る。再禁止前に比して約三倍の騰貴であるが、更に前段に述べた如く、金産額の大増産を企圖する政府は、奨励金と探鑛奨励金を交附してゐる。

右の如く日銀買上値段の連続的引上と奨励金の交附に伴ひ、産金事業の利潤は何れも増大した。従來、採算難に陥つて居た金鑛は復活し、鑛區の稼業狀況は著しく改善され、稼業鑛區は増加し、休業鑛區は減少の一途を辿つて居る。先づ産金鑛區に就いて見るに昭和六年に於ては鑛區數八九三の中稼業鑛區は

一六〇に過ぎず、従つて稼業率は一八%と云ふ低率であつたが、昭和七年には鑛區數八九四、稼業鑛區は前年に比し六七増加して二二七となつたので、稼業率は二十五%に上昇した。更に八年には鑛區數八九五稼業鑛區二六七(前年に比し四〇増)稼業率三〇%となり、九年には鑛區數九二〇、稼業鑛區二二二一、稼業率三六%となり、十年には鑛區數九二四、稼業鑛區三四〇、稼業率三七%と向上した。鑛區數の總數は六年以降三十一鑛區を増加したに留るが、稼業鑛區の數は一六〇から三四〇となり、倍以上に増加した事を知るのである。

産金鑛區稼業狀況

昭和	稼業	休業	計	稼業率
六年	一六〇	七三三	八九三	一八%
七年	二二七	六六七	八九四	二五%
八年	二六七	六二八	八九五	三〇%
九年	三二一	五八九	九二〇	三六%
十年	三四〇	五八四	九二四	三七%

右の如く稼業鑛區の増加した事は昭和六年迄の一匁五圓の相場では採算が採れなかつたものが、相場が二倍となり、三倍となるに従つてコストの高い山も充分採算がされるに至つたからである。従つて之を別の方面から見ると一匁五圓の時代に既に利益をあげてゐた會社は、今日の相場に於ては一面コスト高がありとは云へ、非常に好採算に恵まれて居るわけである。

第二、外地の産金事業

(イ) 朝鮮に於ける産金事業

朝鮮に金を産したことは、遠く神代の昔から我が本土にも知られてゐた。即ち日本書記神代紀には「素盞鳴尊曰く、韓國之島是れ金銀有り、吾が子孫をして知らしめせしむべき所」なる意味の文句があり、同仲哀紀には「八年秋九月……神託有り、皇后に誨へて曰く、眼炎之金銀彩色多く其國に在り、是れ栲衾新羅の國なり」とも記されてゐる。當時既に盛に金銀を用ひてゐたことが察せ

られる。

此の外、朝鮮の金に關する文献は日本にも支那にも數多く存在する。斯様に朝鮮の金は古來甚だ有名であるが、現在金鑛區の分布状態を見ると、正に其の誤りでないことが肯かれるのである。全道十四府二島二百十八郡のうち、金鑛區の存在せぬは僅に八府二島に過ぎない。それ故、從來朝鮮總督府が、朝鮮は全道至る所に金を産出すると紹介して來たのも強ち、誇張の言このみ見ることは出来ない。

殊に、金輸出再禁止後に於ける産金事業の發展振りは、實に目覺ましきものがある。産金増加の跡を顧みると次の如し。

年	數量(担)	金額(千圓)
大正十二年	三、九二六	四、二五三
同十三年	四、一七二	四、九七二
同十四年	四、六九三	六、〇八九
昭和元年	七、一五九	七、九〇五

同	二	年	五、六三二	六、一三四
同	三	年	五、一七五	五、六九三
同	四	年	五、五五三	五、八七五
同	五	年	六、一八六	六、六一九
同	六	年	九、〇三一	九、五八四
同	七	年	九、七〇一	一九、六三三
同	八	年	一一、五〇八	二九、三九四
同	九	年	一二、四二八	三八、五三八
同	十	年	一四、七一〇	四五、四五八
同	十一	年	一七、四九〇	五九、三五四

即ち大正の末期より昭和の初にかけて四千疋乃至七千疋の間を一進一退してゐたが、金再禁止以後は急激なる増加を示し昭和七年には九千七百疋、八年一萬一千五百疋、十一年には一萬七千四百疋となつた。大正十三年に比すると實に四倍以上の増加である。又、之を金額の上から見ると大正十三年の四百二十

五萬圓より年々増勢を辿り、昭和十一年には五千九百三十五萬圓となり、大正十三年に比し實に十四倍の増加となつてゐる。

朝鮮の産金は山金と砂金に分れるが、全産額に對する最近の比率は山金八割五分、砂金一割五分で、砂金は量の點から見ると尙問題にならない。然し産出の増勢から云ふと砂金の増加率は遙かに優勢で、最近十ヶ年間に山金が二倍餘の増加であるが、砂金は實に八倍近い増加を示してゐる。

産金の増加に伴ひ銀の増産も顯著である。即ち昭和元年の銀産額は千五百七十疋、金額にして六萬五千圓であるが、昭和十年には三萬九千三百疋、二百五十五萬圓に達して居る。産額にして二十六倍、金額にして四十倍の増加である。

朝鮮に於て最も有名な金山は、平安北道の雲山及び大楡洞の二つである。雲山は明治三十一年の創業で、米人經營のオリエンタル・コンソリデーター・カンパニーの支配下に在り、昭和十一年の産額は四百九十九萬圓で、朝鮮第一

位に位してゐたが、昭和十三年日本鑛業株式會社が之を買収して、現在は日鑛の經營する所となつて居る。大楡洞は明治四十二年の稼行で、フランス人に依つて經營され、昭和十一年の産額は四百三十一萬圓、朝鮮第二位にあつたが、昭和十四年雲山同様日本鑛業の買収する所となつた。之に依つて朝鮮の二大金山は我國の傘下に歸したわけで、邦家の爲に喜びに堪へない所である。

雲山、大楡洞に次ぐものとして、襄津（日鑛所有、昭和十一年産額二百三十七萬圓）、成興（日鑛所有、同産額二百十萬圓）、金堤（三菱鑛業所有、同産額二百十萬圓）等がある。主要金山を列擧するに次の如し。

金山名	(所在地)	(鑛業權者)	産額(昭和十一年)千円
雲山	平北	日本鑛業	四、九九六
大楡洞	平北	日本鑛業	四、三一四
襄津	黄海	日本鑛業	二、三七五
成興	平南	日本鑛業	二、二三三
金堤	全北	三菱鑛業	二、一〇四

昭和十一年に於ては産額百萬圓以上の鑛山は九ツ、五十萬圓以上のものは二十五鑛山に達するの盛況である。之等の鑛山中には近時急激に増産しつゝ、あるもの多く、こゝに大金山出現が待望されるわけで、朝鮮總督府に於ても銳意之が助成をはかりつゝ、ある。

朝鮮總督府は、從來朝鮮の諸金山が探鑛不充分で、發展遅々たる狀況にあつた事實に鑑み、昭和七年以來探鑛獎勵金を出して來た。即ち坑道の掘鑿には鑿岩機を、砂金鑛床の探鑛にはエムパイヤドリルを使用することを條件とし、若干の獎勵金を交付するのである。その結果、昭和七年二月には坑道の掘進に鑿

金山名	所在地	鑛業權者	産額(昭和十一年)千円
光陽	全南	朝鮮鑛業開發	一、二九二
金井	慶北	金井鑛業	一、二六四
遂安	黄海	ジョン・ダンカン・フレーザー	一、二一一
新延	平北	三成鑛業	一、〇四五
慈城	平南	朝鮮鑛業開發	九六〇

岩機を用ふるもの全鮮中僅かに二鑛山であつたのが、昭和八年二月には二十八鑛山となり、昭和十年末には八十鑛山となり、今後益々普及する情勢にある。

朝鮮總督府は、更に産金奨励の一助として、昭和八年六月、低品位金鑛石賣鑛奨励補助を行つて居る。之は採算上、賣鑛又は山元製鍊に適せざるため、山元に遺棄せらる、悞ある低品位の金鑛石を乾式製鍊所に賣鑛せしめんとするものである。

尙、總督府に於ては、昭和十二年九月、内地に順應して産金令を實施したが産金令の内容は大體内地の産金法と同一で、唯、朝鮮の特殊事情に鑑み二、三の點が異つて居るのみである。

(ロ) 臺灣に於ける産金事業

臺灣に於ける産金の歴史は新しい。

明治廿三年、臺灣の門戶基隆港と臺北市との間の鐵道敷設に際し、基隆川の

鐵橋々脚の建築に従事してゐた労働者が偶然金粒を發見し、其の後上流に向つて砂金採取の業が起つたに創まる。然るに同河と大粗坑溪との合流點を超えてしまふと、急に砂金がなくなるので、不審に思つた一人が、支流の大粗坑溪を遡ると、砂金はたしかに此の川から來て居る。そこでいよいよこの川の上流を探して見ると、斜面の土中にも金が見え、遂に今日の瑞芳金山を發見するに至つたのが明治廿六年であつた。それから更に附近一帯を探つた結果、その翌廿七年金瓜石鑛山が發見された。

其の後臺灣に於てはタツキリ溪砂金の發見まで金鑛の發見なく、従つて主要金産地は、前記の金瓜石、瑞芳の二鑛山及び基隆川砂金地のみである。併し、其の産額は年々増加しつゝ、ある。次の如し。

大正十二年

同 十三年

數量(單位延)

四二〇

金額(單位千圓)

五五七

二六七

三八五

同	十四年	二四二	三七五
昭和	元年	三〇八	四二七
同	二年	四五七	六二二
同	三年	二八〇	三八八
同	四年	四六三	六三六
同	五年	四八八	六四七
同	六年	五五四	七三四
同	七年	八一七	一、七三九
同	八年	六五二	一、六七六
同	九年	一、〇四六	三、二六八
同	十年	一、一五八	三、五五六
同	十一年	一、二九四	四、三八三

金瓜石鑛山は臺北州の東北端に聳ゆる基隆山の南側に位し、前記の如く明治廿七年の發見にかゝるが、昭和八年日本鑛業の買収する所となり同年十一月臺灣鑛業株式會社とした。同時に擴張計畫を樹立、着々その進捗を見たが、十二

年十一月日本鑛業株式會社と合併するに至つた。

瑞芳金山は明治廿六年の發見に係るが、秩序ある採掘法を取つたのは明治二十九年藤田組が採掘權を得たる後である。最盛時には、本邦屈指の金山となつたが、鑛況一時不振となり、大正七年には雲泉商會に讓渡され、更に大正九年には臺陽鑛業株式會社の經營に移り、今日に至つてゐる。

第三、主要金山の概況

我國に於ける金の產出は、既記の如く第四十五代、聖武天皇の天平二十一年（皇紀一千四百九年）二月に始る。近世史に於て最も有名な金山は佐渡鑛山とされてゐる。尙寛永十七年に薩摩、大隅に跨る山ヶ野金山、萬治年間には薩摩の鹿籠金山、同三年には芹ヶ野金山等が發見されたと傳へられて居る。

併し之等の金山の内には佐渡、山ヶ野の如く今でも盛に金を產出して居るものもあるが、其の一部は既に掘り盡されて居る。そして今日最も盛な金山の多

くは明治以來の發見にかゝる。中にも今日我國最大の金産額を有する大分縣の鯛生、北海道の鴻の舞、臺灣の金瓜石等の諸金山は何れも近代の發見にかゝる。臺灣金瓜石の發見は明治二十七年であるが、鯛生金山の發見は更に新しく、明治三十一年である。大分縣鯛生村の富豪田島氏が、所有の山林を開墾中、硬い石塊を發見したが、それをそのまま、放置してゐた。然るに或日村から村へこ干魚を賣捌いてゐた行商人が、偶然こゝに腰を卸し、煙草を吹かしながら、山路の疲れを休めてゐた。ふと氣がつくと傍らに變な石があるので、それを拾つて背にした籠の一部に入れ何心なく持つていつた。その夜偶然星野金山の技師と泊り合せ、その石を持ち出して一目見せると、技師は確に有望な金鑛らしいといふので、それを段々調べた結果、今日内地第一の金山、鯛生の發見となつたのである。

我國の金山の中で古來佐渡を第一としてゐたが、明治聖代に入り、各地に金

山勃興するや、勢力の興廢が起つたのは蓋し止むを得ない。明治三十四、五年頃は牛尾、大口（鯛生産業所有）兩金山盛にして、殊に青化法の應用を見るや一時佐渡を凌ぐに至つたことがある。明治四十年前後には金瓜石鑛山は漸く本格的となり、一時年千疋以上を出し、佐渡鑛山等と格段の差をつけるに至つた。然るに明治四十三年日韓合併成るや、雲山が頭角を表はした。

其の後内地に於ては、乾式製鍊所が盛に買鑛を行ふ傾向を生じ、金は銅の副産物として産出する如き状況となつた。就中日立鑛山は、大正三年二、七〇〇疋を産出し、雲山、金瓜石、佐渡を抜いた。又、小坂銅山も盛に金を産出して第二位となつた。

その後、二十數年を経たる今日に於ては、金輸出再禁止後金價昂騰の影響で更に著しき消長の跡が見られる。最近に於ける内地重要鑛山の産金額を掲げると次の如くである。

重要鑛山産金額 (單位冠)

産地	昭和十二年(七月迄)			
	十一年	十年	九年	八年
日立	二、四九九	三、九六八	三、五四八	二、九八五
茨城	二、三九九	四、七一一	三、一八四	二、七三三
日本鑛業				二、七三六
大分	二、三三三	一、五一一	二、〇四九	二、三六三
鯛生産業	一、三三三	一、五一一	二、〇四九	一、九七
香川	一、〇四〇	一、六三三	一、五五〇	一、三〇三
三菱鑛業				一、三〇三
北見	一、二五五	二、一〇四	一、四九九	一、五三三
住友合資				一、五三三
藤田鑛業	七七七	一、三三一	九三九	七五三
申木野	五五七	一、〇〇四	九一九	一、〇五三
三井鑛山				一、〇五三
愛媛	五五四	七九五	八〇五	八六
住友別子				八六
静	三三一	五五五	五四三	二四
静				二四
持越鑛業	一七四	五五三	三六三	二七
尾去澤	一八一	五八	三四九	二〇〇
三菱鑛業				二〇〇
山ヶ野	一九	三三	三〇	一九
薩摩興業				一九
三井鑛山	三九九	三五	三九	二五
三井鑛業				二五
佐波	一五	二五	二九	二七

備考 一、商工省發行重要鑛山統計表に依る

一、大口鑛山は近年の増産顯著

金井星野	福岡	金井鑛山	一六	二六	三三	三
發盛	秋田	大日本鑛業	一七	二五	三九	一六
足尾	栃木	古河鑛業	一五	三三	二二	一六
大萱生	岩手	住友合資	三	九	五	
但馬	兵庫	但馬金山	三	七	五	
鯛生星野	福岡	鯛生産業	五	八	七	
契島	廣島	昭和鑛業	七	八	六	
神岡	岐阜	三井鑛山	四	七	六	
北ノ王	北見	板谷宮吉	五	七	五	
金澤	靜岡	村田與次郎	五	五	五	
神美	兵庫	石原産業	七	七	五	
荒川	秋田	三菱鑛業	五	九	四	
松川	福島	大寶彌男二	四	六	六	
勝香	鹿兒島	板谷宮吉	一〇	七	六	
布計	群馬	鯛生産業	五	九	六	
千歳	北海道	中島門吉	四	五	三	

金産額発表禁止直前の昭和十二年（七月迄）の數字に依ると日立は第一位、佐賀關第二位、鯛生第三位で、以下鴻ノ舞、直島、小坂、串木野、別子、靜狩の順序である。

併し右表に於て、日立、佐賀關、直島、小坂、別子、尾去澤等は銅の乾式製鍊所で日立の分には福島縣高玉、宮城縣大谷等の金山からの分が含まれて居り佐賀關には臺灣金瓜石、直島には、兵庫縣生野、新潟縣佐渡の金鑛、小坂には秋田縣花岡の鑛石、別子には靜岡縣土肥金山の金鑛が含まれてゐる。

残りの鯛生、鴻ノ舞、串木野、靜狩、持越、山ヶ野等の分は、何れも金銀山に於ける濕式製鍊の産物で、その鑛石は主として自山のものである。従つて内地の純粹の鑛山としては鯛生、鴻ノ舞、串木野等が上席を争ふもので、又、右表に示されてゐないが大谷、土肥等も主要金山に列するものである。

次に右表に依つて主要産金會社の内地に於ける産額を見るに、昭和十一年に

於ては日本鑛業が八千六百七十九疋で第一位を占め、三菱鑛業は二千四百二十一疋で第二位、住友合資は二千百九十五疋で第三位、鯛生産業は千六百八十三疋で第四位、三井鑛山は千七十七疋で第五位となつて居るが、昭和十二年（七月迄）の數字に依ると日鑛の第一位は動かないが、鯛生は第二位に躍進從來の地位を回復し、三菱鑛業は第三位、住友合資は第四位、三井鑛山は第五位である。

主要産金會社内地産金高表（單位疋）

日本鑛業	昭和十二年（七月迄）		十一年	十年	九年	八年
	四、八八八	八、六七九				
鯛生産業	一、四六三	二、一四三	二、〇三二	一、九五〇	四、九九九	
三菱鑛業	一、七七一	二、四三二	一、五五二	一、七五九		
住友合資	一、二六六	二、一五五	一、四九二	一、五三三		
三井鑛山	八七三	一、〇七七	一、三三〇	一、三三七	一、一〇六	

第八章 金動員の積極化

—産金並金集中關係諸法令—

支那事變初期までのわが金政策は前章に概説したが、事變が本格的長期的體勢をこるにつれて、國際收支の改善、爲替水準維持のため、對外決濟力の充實はますます重要性を加へて來た。従つて金政策に於ても、産金増加策が著しく積極化されるだけでなく、消費制限、退藏金の動員などの金集中策がますます強化されねばならない。

金増産に對する獎勵策

金の増産對策として、金買上値の引上及び産金法の制定されたことは前述した通りであるが、この外になほ次の如きものがある。

第一、日本産金振興株式會社の設立

日本産金振興株式會社は、昭和十三年九月六日の設立で、資本金五千萬圓のうち政府が二千五百萬圓を出資してゐる。當社の目的とするところは、「産金事業に對する資金の融通又は投資」を中心に、次の如きものである。

1. 金鑛業又は金製鍊業又は金鑛業金製鍊業の用に供する器具、機械類の製造等に對する資金の融通又は投資
2. 金鑛業又は金製鍊業
3. 金鑛業又は金製鍊業の爲必要な器具、機械、材料又は設備の賣買
4. 含金鑛産物の賣買
5. 委託による金鑛山に關する調査又は鑑定

而して同社は右の資金調達のため、拂込株金の五倍を限度として産金振興債券を發行し得ること共に、右債券の利拂は政府によつて保證されてゐる。さらに第七十四議會には同會社改正法が通過し（十三年六月二十三日より施行）、探

鑛及製鍊所建設補助費として、同社の支出する資金に對し國庫の補償が與へられる途が拓かれてゐる。同社は十三年十月よりその事業を開始してゐるもので新金鑛山の開發、金製鍊力の増大について尠からぬ國策的使命を果しつつ、ある

第二、産金獎勵規則の改正

右の産金振興會社による周到なる金増産獎勵施設の整備に對應して、産金法に基き、昭和十四年四月産金獎勵規則の改正が行れた。改正の要旨は、從來産金獎勵金は豎坑、水平坑道のみに交付されてゐたのを改め、ボーリングにも獎勵金を交付する外、ボーリングによる砂金鑛の採鑛にも獎勵金の範圍を擴大すること、なつたのである。而して十五年四月には産金業者にとつて更に、次の如き重要な改正が行はれた。即ち

◎探鑛獎勵金の限度は、坑道掘鑿費の半額以内にして、次の何れかに該當する金額とされてゐた。

- (1) 水平坑道にあつては延長一メートルに付二十圓
 - (2) 豎坑にあつては延長一メートルに付四十圓
 - (3) 金鑛を目的とする試錐にあつては、孔深一メートルに付十五圓
 - (4) 砂金を目的とする試錐にあつては、錐孔一本に付五圓
- それを改正では、(1)の二十圓を三十圓に、(2)の四十圓を九十圓に、(3)の孔深一メートル十五圓を延長一メートル二十圓に、(4)の五圓を十五圓に、それぞれ増額が行はれた。また

◎選鑛場又は製鍊場設置につき交付する獎勵金の額は、その設置に要したる費用の半額以内を、——改正では七割以内に改められた。

新産金の増加獎勵が如何に積極化しつつ、あるかを窺ふに十分であらう。

第三、増産金買上價格割増制度

昭和十四年十月二十五日、本邦爲替相場の基準が「磅貨」より「弗貨」に置

き換へられ、相場は二十三弗十六分の七に決定した、め、我國の金買上價格（一瓦三圓八十五錢）と當時の世界市價との間には一瓦八十九錢見當（運賃保險料諸掛りを控除したもの）の開きを生ずるに至つた。政府ではこの差益を財源として、増産金の買上價格につき割増制度を設定することになつた。十四年十一月實施された増産金買上規則がこれである。

この制度は初め次の如き規定であつた。即ち、先づ政府への金賣却量が、昭和十三年度より増加した製鍊業者に對し、その増加部分につき

十四年度は …………… 一瓦當り 二圓
 十五年度以降は増加部分のうち

十三年度の新産金賣却量に對する	……………	一瓦當り	二圓
一定割合を超えた部分	……………	……………	……………
全右	……………	……………	……………
一定割合以内の部分	……………	……………	一圓

右の割合で割増金を交付し、交付金の九十五%を直ちに日本銀行に供託フルさせ、日銀は之を、十三年度より増産した金鑛山に、増産分に應じて分配すると言ふ仕組になつてゐた。ところがその割増金交付の對象が、全國の産金量に對する全國の増産分となつてゐた、め、鑛山業者はフルした割増金の交付を受けるまではその額が判明しないと言ふ欠點があつた。

之を十五年四月の改正では、次の如く改められた。即ち

(一) 金製鍊業者に五%を與へることをやめて、金鑛山毎に増産分に對し、前記の方法で、一瓦に付二圓乃至一圓の割増金を直接に交付すること、し(第一種割増金)。

(二) 更に生産條件の悪い鑛山についても特に指定し、一瓦に付一圓の割増金(但し生産條件により五十錢から二圓まで増減して交付することに改正された)(第二種割増金)。

つまり従來の規定が、割増金は基準年度より増産した部分に限り交付すること、なつてゐたに對し、増割金交付の範圍が擴張されたのである。

なほ本規則に違反したとき又は不正の行爲があつたときは、割増金の交付の減額、停止又は返還を命ぜられることがある。

第四、産金量届出規則

金の増産奨励が積極化されると共に、増産計畫の確實を期するため、産金法第十條に基いて、産金量届出規則が昭和十四年十一月實施された。この規則は増産金買上規則と關聯するもので、各金山をして毎年上期末及び下期末の二回に亘り、昭和十三年を基準として増産又は減産したる金量を、商工大臣に届出しめ、増産金の積極的對策に資すべき基本資料を得やうとするものである。前述増産金買上規則に於て、割増金交付の範圍が擴大されたに對應して、十五年二月、商工大臣は特別の事情ありと認むる鑛山については、業者の申請を待た

ず進んで産金基準數量を變更指定し得ることに改正された。從來と雖も商工大臣の指定に依り規定に依る數量以外の數量を、基準産金量と爲すことが出來たが、商工大臣が進んで業者の申請を待たずして、産金量の變更を爲し得ること、なつた處に改正の積極性が見出される。

第五、買上代金支拂の便法

従來、政府に於て買上げる金地金の代金は、造幣局の品位試験の結果によりその含有する純金量が判明するのを待つて支拂はれてゐた。金動員の必要が増大するにつれ、全國數箇所に造幣局の出張所を設け、鑑定能力の増進が圖られたが、産金業者及び大口の金所有者は、品位決定に相當の日數を要する關係上金利の負担其他金融上の不便が尠くなかつた。そこで政府では一層産金の増加に資するため、昭和十四年五月、金買上代金を概算拂する法律を制定するに至つた。政府買上金地金概算代金支拂規則がこれで、造幣局に金地金が輸納され

たときは、その品位試験の結果を待たずに、買上代金の概算拂をなすこと、なつた。本規則の適用を受け得る者は(1)推定純金量一件につき三百グラム以上のもの及び(2)大藏大臣に於て適當と認めたる者に限られる。

第六、民間保有金の集中

以上のやうにして、産金増産の積極方針が確立され、周到なる各種の増産施設が着々その機能を發揮しつゝ、ある他方に於ては、金の集中及び使用制限を目的とする消極部面の諸方策も相次いで行はれてゐる。

(一) 金製品の條件付買入

先づ日本銀行では、國內退藏金の動員のため、買戻特約附金製品買上規則を定め、取敢へず昭和十三年七月十五日以降二ヶ月を一期として實施され、後更に買入期間を一箇月延長された。賣戻期間は支那事變終了後二ヶ年を経過せるときより開始し、その後一箇年となつてゐる。

(二) 産金法の改正

更に第七十四議會に於ては、産金法の改正を行ひ、民間保有金の強制買上が規定された。即ち、政府は必要ある場合には何時にても、金の所有者に對し、金の處分を禁止、若しくは日本銀行其他政府の指定する者に賣却すべきことを命じ得る、と言ふ條項が、産金法第十一條に加へられた。金の強制買上の権限は、既に外國爲替管理法中に規定されてゐたが、それを獨立の規定としたものである。

(三) 金保有状況の調査

事變の長期化に備へて、國內に於ける金貨、金塊、其他の退藏金の保有状況を調査して置かねばならぬ。そのため、産金法第十二條の規定に基き昭和十三年十月、金貨幣及金塊保有状況調査規則が發布され、十一月十五日午前零時現在に於ける金貨幣、金塊、又は外國金貨幣の所有高の報告を求めた。而して十

四年七月一日午前零時を期し、範圍を金製品まで擴大して第二回の金國勢調査が行はれた。調査の対象とされたものは、金製品、古金貨幣、外國金貨、金地金又は金貨幣で、金ペン、萬年筆、シャープペンシル、バツヂ、イニシヤル、ノヅル、醫療針及避雷針の八品目は除外された。

(四) 金賣却の運動

右のやうな金の強制買上の發動を待つまでもなく、金集中は愛國運動として地方官廳を中心に、組織的に着々實行に移されて行つた。各金融機關、及び新聞社取扱の金買上げは頗る好成績を収めてゐる。

第七、金使用制限の強化

一方、金の消費部面に於ても統制は強化された。今や金は國際貸借の決済用具として、重大な使命を果しつつ、ある際、單なる装身の具としての使用を差控へるべきは當然である。

政府では、昭和十二年末に金使用規則を制定し、十三年八月にはこれを全面的に改正したが、更に十四年末には金委員會の決議により、第二回目の改正が行はれた。

改正の主なる点は、金を用ひたる製品（金を含む合金、金鑽、金張地金、金箔、金絲、金粉、金液、金鍍金液及金化合物並に之等を用ひたる製品を含む）の製造、加工及び修繕について許可を要すること、及び金の譲渡に大藏大臣の許可を要することは、従前のまゝであるが、金の取引についての制限、及び金箔、金絲、金粉等の賣買價格につき、大藏大臣の指定權限が強化されること、なつたこと等である。

以上のやうに、金の使用に關して徹底的な制限が加へられるに至つたのであるが、我々が金を保有する本質は、金指環、金鎖等の装身具であらうと、祖先傳來の家寶であらうと、結局非常の場合に備へる貯蓄にあると言へやう。こす

れば我々の祖國が今や破天荒の大事業を成就せんとしつゝ、あるとき、之に最も大きな役目を果す金を國家の用に供することは、國民として最も本懐させねばなるまい。

第九章 今日の世界金問題

以上のやうに、近時我國に於ける産金増加の重要化は、産金事業の國策的な使命をいよ／＼増大すると共に、諸種の積極奨励策の下に、その發展を著しく助長してゐる。

この我が産金事業の重要及發展は、然らば、將來も同一な步調を以て維持せられるであらうか。

この觀測は決して簡単な問題ではない。それは一に世界金價格の將來と言ふ複雑な問題に懸るところであり、金價格の將來は、根本的には金の需要供給の關係に基き、直接的には國際金市場價格の基準たる米國の金買上値によつて左右されるべきで、頗る廣汎且困難な問題の處理を必要とするからである。

然しながら、金の價格が「需給の法則」によつて支配される限り、また最近

に於ける米國の金問題から見る限り、尠くも金價格は今後遽かに低落に向ふものでないと言ひ得るだらう。

第一、金過剰の問題

最近の世界の金問題は、「金の過剰」がその中心に置かれてゐる。曩の歐洲大戰直後、及び一九二九年から始つた世界恐慌當時は、金の問題は、金の不足並に偏在にどう對處すべきか、と言ふことであつた。ところが現在では、往年とは全く逆の形で問題となつてゐるのである。

思ふに世界大戰直後にあつては、戰爭によつて各國の通貨は膨脹した一方に於て、世界の新産金額は戦時中より戦後にかけて年々減少したため、金不足の問題を惹起した。ところがその後、(一)平價の切下が行はれたこと、(二)一九二三年より世界の金産額が漸増に轉じたこと、及び(三)印度等にあつた退藏金が解放され、貨幣用に轉化したことなどによつて、漸次金の供給増加

を來した。之が一九二九年(昭和四年)以來の世界恐慌、殊に本位貨恐慌に直面するに共に、戦後の「金の不足」問題は、「金の偏在」に轉換したのであるが、最近は遂に「金の過剰」問題に一轉したのである。

最近の金問題は、昭和十二年四月のロンドン金塊市場の金騒動にはじまる。そのキツカケとなつたのは、ソ聯の金が多量に流入して來たことにあつた。これがためかどうか、五月末から六月初にかけて、ロンドン市場は夥しい退藏金の出廻りを見て、金の氾濫に見舞はれた。そこへアメリカ政府の金買上價格引上説の流布によつて、金價格が暴落したため、買上價格の高いアメリカへの金流出は巨額に達した。その後爲替平衡資金の活動と、サイモン及びルーズベルトの金政策不變の聲明によつて、この金騒動は一應收つたもの、引續き金の流入に悩むアメリカの金政策と、年々の世界産金の増大及退藏金の解放を繞つて、金問題は「金過剰」の問題を主流として、依然と残り残されてゐる。

然らば金は、實際果して過剰であらうか。

第二、金生産の増大

先づ近年世界の金の産出状況を見るに、確に急増してゐる。試みに國際決済銀行の發表によれば、一九三八年までの産金高は、年々増大を續けてゐる。尤も最近二年間（一九三七、三八年）の増加率一五・四―五・六%は、その前二三年に比べ低下してはゐるが、一九三二年以降の七年間に五二%の増加で、年平均七・四%の増加率である。

主要國に於ける金生産高

國名	單位純金千オンス		増減率(%)
	一九三二	一九三八	
南アフリカ	二、五五九	三、二六一	+
南餘の世界各國	三、六九五	三、四九三	+
ソヴェート聯邦	一、九六六	五、〇〇〇	+
アメリカ	二、四四九	五、〇〇〇	+

カナダ	三、〇四四	四、七六六	+	五、四九	+	一五・一
オーストラリア	七四	一、五七〇	+	二九・九	+	三三・七
メキシコ	五四	九六	+	五・八	+	八・三
ローデシア	五一	八六	+	四・四	+	一・〇
日本	四三	〇〇〇	+	〇〇〇	+	〇
其他諸國	三、六三	五、九三	+	六・二	+	六・六
金生産總高	三四、三五四	五、八五四	+	五・〇	+	五・六

世界産金増加を刺戟した要因としては、次の二點が擧げられる。

(イ)世界不況に伴ふ物價の低落(金生産費の低下と金購買力の向上)

即ち一九二九年から、一九三三年に至る世界不況にあつては、金は一般物價の低落によりその購買價値を上昇し、他方物價の低落に伴ふ勞賃の低下と相俟つて、産金事業の採算を著しく有利に展開した。

(ロ)世界諸國の金本位停止並に平價切下による通貨の對金價値の低下(金の通貨價値の向上)

即ち、一九三二年九月英國の金本位停止以來、一九三四年四月の米國の金本位停止、及び次いで行はれた弗引下を目標とする金買上値段の引上開始によつて、ロンドン金相場は著しく刺戟され、一九三五年の年平均は舊水準に比し實に六七%の昂騰振りであつた。英米の金價の昂騰が、他の金離脱國の金價を一齊に急騰に導いたことは言ふまでもない。

かくて産金事業の増産並に新規企業計畫は著しく刺戟されたのである。

然しながら、金の増産を導いた右の二原因は、著しく事情を異にして來たことを注目せねばならぬ。即ち一九三四年物價が反騰趨勢に轉ずるに及んで、漸次生産費の昂騰を來したのみでなく、他面金價の昂騰趨勢も、世界各國に於ける通貨安定策の遂行や、金過剰に悩む米國の金買上價格引下を懸念する人氣の擡頭等で、尠くも今後著るしき昂騰の可能性は乏しいものと思惟される。前表で一九三七年後の増産率が低下してゐるのも、こうした事情の反映であること

れば、一時の如き高率の年次増産が再び繰返されるかどうか多少疑問があらう

第三、退藏金の解放

金の供給に關しては、單に新産金を問題とするだけでは足りない。退藏金の解放と言ふ問題を無視されないのである。現に一九三七年春の「金騒動」に於ては東洋方面からの退藏金の解放の加つたことがその波紋を大きくしたのである。然し國際決済銀行の年次報告によれば、今日では東洋諸國（主として印度支那）からの退藏金の解放は、最早その重要性を喪失してゐる。退藏金が金供給に對し重要な量を示してゐたのは、一九三一年英國の金本位制停止に因るスターリングの減價以來の數年間であるが、既に一九三二年が最高額（三億七千八百萬弗）で以後減じ、一九三七年前年より半減の六千八百萬弗、三八年には更に五千七百萬弗に減じてゐる。同年の世界新産金額十二億九千萬弗の四・四%に止るのである。

東洋諸國よりの金 (單位百萬弗、純金一オンス三十五弗替)

年	印度	支那	香港	總計
一九三一年	二〇八	一八	二〇	二四六
	三二〇	三九	一九	三七八
	二〇二	二四	三三	二五九
	二二〇	一八	二二	二六〇
	一五〇	一四	一一	一七五
	一〇九	一二	一〇	一三一
	五〇	一七	一	六八
	四三	※※〇	一四	五七
總計	一、三〇二	一四二	一三〇	一、五七四

備考 ※ 私藏金のみ ※※ 支那は四百萬弗の正味輸入を示す

即ち、退藏金の解放は、最近ではさまで重要な問題ではなく、寧ろ反對に金の退藏の方が重要性を帯びて來る順序となつてゐる。と言ふのは

(一)世界的政治不安が増大し、軍備増強のためのインフレーション、平價切

下等の可能性がますます濃化するにつれ

(二)金が確實無比の保證を持つ資産であるこの感想が濃厚となり、資産の唯一の逃避所として金が選ばれるからである。

以上のやうに、金の新規生産が従前の如き増勢から停滯的であり、また退藏金の解放量がさまで問題でないとするならば、今後の金の供給は特に著しい増大があることは考へられまい。

然らば、之に對する金の需要の方面はどうか。

第四、金需要は衰へず

周知の通り、金の生産コストは非常に嵩む。従つて供給は需要を俟つて初めて生ずる。つまり金の將來は、供給よりも寧ろ需要如何に懸るところが大きいと言ふ關係にある。

貨幣論者の間には、金の價値を、魔力や迷信に基いて維持されてゐるもので

あり、不合理な偶像崇拜に過ぎないものとする見方がある。勿論、金を愛好する人間の心理が、金の評價の上に於て非常に大きく作用してゐることは事實である。併しそれが單に迷信や崇拜に過ぎないのならば、文化の高度に進歩した今日、一オンス三十五弗と言ふ如き高價が支拂はれる筈はあるまい。屢述の如く、金は他商品のやうには供給過剰の憂ひがなく、他の財寶のやうに磨滅、破損、減價、崩壞の危険がなく、従つて、將來の必要に對する價值保藏の最も勝れた獨特の手段である。金の價値はこの卓越した用途に潜むのである。近代社會に於て、生産と配給の金融には、尨大な流動資金の蓄積が必要である。この流動資金は金の形式では蓄積されないが、金融界や實業界の心理として、それらの流動資金が實質的な金準備によつて保證さるべしとの強い要求がある。尤も管理通貨制度の下では、貨幣は金と無關係に管理され得るかも知れないが、國際通貨としての機能の點では、金から獨立し得る時期が遽に到來することは考

へられぬ。蓋し、金は、世界を通じて最も好ましく且歡迎される商品であつて國際的通貨の基礎として必要とする總ての機能——國際收支の決済、國際貸付の金融、資本の國際的移動——を果し得るからである。

なほ金の需要については、準貨幣用、即ち工藝美術方面への消費を無視出来ないが、これは全需要に比べれば極く少い。國際決済銀行の報告によれば、「世界全體として見れば、恐らく東洋方面より得た額より輕少なものとされてゐる。

従つて要するところ、現在の金過剰の問題、従つてまた金の將來は、新産金量との關聯の下に、貨幣用としての金需要の強度に依存するものと言ふことが出来るのである。然らば今後の金の貨幣的需要は、具體的にはどんな形で持續されるであらうか。次の諸點が考へられる。

(1) 純粹な管理通貨制度を好まない國々が通貨に對する金準備として、(2) 國際

決済用具として、即ち各國の紙幣を相互に聯繫し、以て國際取引を可能ならしめる手段として、(3)交換の手段としてではなく、將來の價值保藏手段として、などの需要であつて、これらは、(4)過去十數年間、金の不足に喘いでゐる國々にとつて、特に強い要求であらう。

即ち、金は貨幣用として、依然強度の需要を保持するものと見られ、従つて金の生産が特殊事情により特に急増しない限り、世界全體として見れば、近い將來に於て金過剰を憂ふるは當らないと思はれる。

尤もこれは世界全體についての話であつて、國別に見れば金の著しい偏在が見られること、既述の如くである(第三十頁各國金保有量に關する表参照)。而もその偏在が、最近では過去の何れの時期よりも著しいことが、今日、金過剰——實は局部的過剰であるが——として問題とされる所以である。殊に世界最大の金偏在國たる米國が、金過剰對策としてどう言ふ方策をこるかは、その金

買上價格が世界金市價の基礎となつてゐるだけに、最も注目を要するところであらう。

第五、米國の金問題

米國は世界最大の金保有國である。その額は、昭和十五年五月末月現在で百九十二億弗、即ち世界實數の貨幣用金總額の七〇％に達する。通貨の流通量七十四億弗に對し、過剰金準備は百億弗以上に達するのだから、金の過剰に對する悩みは年々深刻化してゐる。

米國に金流入の始つたのは、一九三四年一月、金購入を開始して以來のことであるが、然らば、米國に何故このやうに巨額の金が流入するのであるか。

それは、先づ一オンス三十五弗の確定値段で無制限に金購入を行つてゐることが一因でもあらうが、根本的には、米國が金融的にも政治的にも最も安定した國であり、且巨額の輸出超過國たることに基く。即ち、諸外國の莫大な資本

が、安定の地を米に求めて逃避して來るのみでなく、各國の軍備擴充の強行に伴ひ、商品の受取超過も巨額に達したがためである。

このやうにして、米國へ尢大な金が集中する結果、米國は目下次の二つの金問題に當面してゐるわけである。即ち

(1)米國自體にとつては有用性の少い金を受取り、それと交換に巨額の物資を輸出し、且利子を支拂ふと言ふ國家的損失があり

(2)また加盟銀行の準備金の増加を來し、常にインフレ惹起の可能性が生じてゐること、である。

従つて、これの對策が早くから問題とされ、例へば金買入價格の引下を始め輸入制限或は金の死藏等、過剰準備金の削減や金の流入阻止の方策が論議されてゐる。

然しながら、現在米國は世界の唯一の金購入國であり、世界の金價格は米國

の買入價格が基準となつてゐる關係上、その金政策は世界各國の爲替及それを通じて各國內經濟に及ぼす影響は極めて大である。従つてその實行には幾多の障礙があり今日未だ定論を見るに至つてゐない。

例へば、金の買入を停止すれば、金の價值は低落し、米國の蒙る損害は莫大なものがあらう。それでは金の買入價格を引下げたらどうか。この案の窺ふところは、その結果として生ずる混亂は金買入の停止より輕微であらうし、又世界産金額の減少を來し、流入する金の價格も低められやう、従つて問題もそれだけ輕減されやうと言ふのである。然し之にも重大な障礙を免れない。買入價格引下による産金國及通商國の爲替相場の大混亂は別としても、世界最大の金保有國たる米國にとつて、手持金の評價損は莫大に上り、公債の増發によりこれを補填せねばならぬ。一オンス一弗引下げても、その損失は五億弗に上ること見積られる。政府としてはその負擔に耐えぬであらう。

而して最近はや金の輸入に對し關稅を課し、一方金の輸出に補償金を交付せんとするもの、或は協定により特定國のみから一定量に限り金を購入しやうと言ふこと、などが考へられてゐるが、未だ定論とすべきものはない。

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字列が続く）

第十章 結 言

—我國産金事業の將來—

以上を要するに、最近の産金情勢と金の需要の趨向から見て、遽に世界的な金の絶對的過剰を憂ふるに當らず、また最大の金過剰國たる米國に於ても、所有金の價値を維持するためには、現在の金の買上を維持するの外ないと考へられる。近い將來に世界の各國が完全な金本位制を復活する見込は樹ち難いとしても、國際貸借決済要具として金の機能と重要性は、毫も失はれることはあるまい。又米國が現在の如く確定價格で無制限に金の買上を行なふ以上、金價格の下限は制約されてゐるものと云へやう。

我國の立場としても、長期經濟戰の途上産金増加の必要は今後ますます加重されるのみであらう。而してその金増産を刺戟する捷徑は、金買上價格の引上

を行ふか、増産奨励金の増加に在ることは言を俟たないであらう。ところで現在の金買上価格（一瓦三圓八十五錢、一匁十三圓四十三錢七厘五毛）は、昭和十三年五月二日決定、今日に至れるものであるが、之についてマージンが現状にある限り今後政府が引上を行ふ意思のないことは屢々言明されてゐる。そしてその代り十四年十一月以來増産金割増制度により、基準産金量を超える増産に對して補助金が交付されてゐることは前言せる如くである。

然らば、現在の金買上価格並に増産奨励金は、金の世界市價に對して如何なる關係となつてゐるか。換言すれば、増産奨励金をこめた實質上の買上價格が世界金市價に對して、なほ引上の餘地があるか、どうかである。

先づ順序として、我國の金買上値段が何を基準としてゐるかと言ふに、昭和十三年五月、現在の一瓦三圓八十五錢に引上げられるまでは、ロンドンの金塊相場が基準とされてゐた。即ち、前回の買上値一瓦三圓七十七錢（昭和十二年

五月實施）までは、ロンドンの金塊相場三週間平均を一志二片の對英爲替相場で換算し、現送料を差引いたものが我國の買上値段とされたのである。而してこの買上價格（一瓦三圓七十七錢）決定當時はロンドンの金塊相場に對し、まだ二分七厘のマージンが残されてゐた。

参考までにロンドンの金塊相場は如何にして決定されるかを述べて置かう英國では一九三二年の金本位停止以降、金價格決定についての法定基準は現存しないが、米國で一オンス三五弗で金買入を行つてゐる關係上、之と對米爲替と睨み合せて間接にスターリングによる金相場が割出される。然しこの場合、ブローカーの手數料、包裝費、保險料、運送費、利子、試金料及合衆國政府の徴收するコミッション等、約〇・六五%を差引かねばならぬ。即ち金一オンスの弗貨三五弗からその〇・六五%たる約二三仙を差引き、之を對米爲替相場で換算したものが、金の對米現送點となり、他方米國の對英現送

點は、三五弗に二三仙を加へ、爲替で換算したものが米國に於ける對英現送點となる。従つてこの兩現送點が、金の磅價格の限界となるのであつて、例へば對米爲替相場を四弗とすれば、對米金現送點は、 $(\$35 - \$0.23) + \$4 = \38.6925 即ち八磅一七志七片となり、對英金現送點は、 $(\$35 + \$0.23) + \$4 = \39.8075 即ち八磅一七志七片となるから、ロンドン金相場は、この兩限界に基準を置きつゝ、その時の需給關係によつて決定されるのである。

ところが、十三年五月の金買上値引上（一瓦三圓八十五錢へ）に際しては、從來基準としてゐたロンドン金塊相場三週間平均によることを止め、米國政府買入價格（一オンス三五弗）と當時に於ける對米爲替相場最近の平均二九弗を基礎とし、之に千分の五の現送料を見て計算された。この換算相場は一瓦三圓八十二錢五厘となる。従つて海外とのマーヂンは全く消滅してしまつたのである。

然るに、周知の通り、昭和十四年十月廿五日、本邦爲替相場の基準は、磅リンクから弗リンクに変更され、その爲替相場は二三弗一六分の七に決定された。この結果、米國の金相場を新レートにより換算すると、一瓦四圓八十錢となり現送費の値上りを一瓦當り平均五錢としても、現在の我國買上價格は世界金市價より一瓦につき九十錢見當下値となつたわけである。従つて政府屢次の言明のやうに買上價格の引上が行はれないとすれば、九十錢のマーヂンはすべて増産獎勵金に投じ得るわけである。

現在の増産獎勵金は前述した（第八章）如く、十三年度より増加した産金量について、一定割合（現在三%となつてゐる）を超えた部分に對し一瓦當り二圓、その割合以内の部分に對し一圓を交付されることとなつてゐる。

然らば右の世界金市價とのマーヂンが、すべて産金獎勵費に注ぎこまれることすれば、如何なる計算となるか。この場合基準産金量は現在の買上價格で買上

げられるから、これの持つ世界市價とのマーヂンも増産分に振向けられてよいこととなる。従つて、いま假に昭和十三年度の基準産金量に對し、二〇%及三〇%の増産とすれば、増産金一瓦に對して與へ得る割増獎勵金は、二〇%の場合五圓四十錢となり、三〇%なら三圓八十七錢となる。ところが、現在の増産割増金は前述のやうに、最高二圓で、一圓の部分もあるから、平均すれば二圓以下である。

従つて世界金市價と我國の買上價格との間に、現在のマーヂン（一瓦約九十錢）が存續する限り、換言すれば、いまの米國の金買入相場（一オンス二五弗）と爲替相場若しくは現送料に變動ない限り、金の増産に對して、割増獎勵金増額の餘地が、政府の負擔とならずして、未だく、尠からず残されてゐるわけである。我國が破天荒の聖業完遂のため、今後長期に亘り戰時經濟體制を推進してゆくとためには、自給資源の現状から見て、國內産金の増加が最も緊急な課題の一

つなること、縷述するが如くである。歐洲戰亂の推移に於て全體主義國の優勢から、聽て或は金役割の無力化、従つて金價値の低落する時期が到來するのではないか、と言つた懸念が散見されないでもない。こゝう言ふ憂慮が、金の現在果しつ、ある職能若しくは牢固たる地位から見ても、全然一片の杞憂に過ぎない尤も悠久數千年とかの前途を議論の對象とする一派の貨幣學者の間では、金價値低落の時代が全然來ないとは云ひ切れないだらうと論斷するであらう。然し百歩を譲つて、さう云ふ時期の到來を是認するとしても、さう云ふ時期の到來を豫期して、産金増加若しくは、金集中への努力は、寸毫と緩めることを得ない切迫した事情にある。周知の通り、我國は目下聖戰時下に在る。而して戰時下に於て金の獲得、保持は絶対必須である。

とすれば増産金割増制度の活用を主軸として、産金事業への保護助成は國家的緊要性から今後ますます積極顯現されるであらうことは、推察に難くあるま

い。

我國産金事業の發展は、今後になほ多大の期待を藏するものと言へやう。而して産金事業の國家的使命、重要性は一層加重せられる。産金事業の助長、發達は、國家として銳意これに努力してゐること、前縷説に依りて、判明するであらうが、我々國民としても、産金事業の重要性を一層認識する處あらんことを切望してやまぬ。而して一國民として、産金報國を期するには、産金會社株式への投資が、最も捷徑であること云へる。大方投資家の深甚なる考慮を冀ふ所以である。

附
録

金ニ關スル參考法令

金ニ關スル參考法令目次

① 産金法……………

② 産金法施行令……………

③ 産金買上規則……………

④ 産金法第十二條ノ規定ニ基ク命令ノ件……………

⑤ 政府ニ賣却スベキ金地金買上價格……………

⑥ 産金獎勵規則……………

⑦ 増産金買上規則……………

⑧ 金準備評價法……………

⑨ 金準備評價法施行期日ノ件……………

⑩ 金準備評價換ニ關スル件(抄)……………

⑪ 貨幣法(抄)……………

⑫ 金資金特別會計法(抄)……………

⑬ 金資金特別會計法施行期日ノ件……………

⑭ 日本産金振興株式會社(抄)……………

⑮ 金使用規則(抄)……………

① 産金法 (昭和十二年八月十一日 法律第五十九號 昭和十四年四月十日改正)

第一條 合金鑛物、砂金又ハ製鍊ノ過程ニ在ル合金物(以下合金鑛產物ト總稱ス)ヲ取得シタル者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ金地金ニ製鍊シテ政府ニ賣却シ又ハ之ヲ金製鍊業者若ハ第三條第一項ノ規定ニ依リ合金鑛產物ノ買入ノ免許ヲ受ケタル者ニ賣却スベシ

前項ノ合金鑛產物ノ範圍ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第二條 政府ハ必要アリト認ムルトキハ合金鑛產物ヲ取得シタル者ニ對シ之ヲ金製鍊業者又ハ第三條第一項ノ規定ニ依リ合金鑛產物ノ買入ノ免許ヲ命ズルコトヲ得

政府ハ必要アリト認ムルトキハ金製鍊業者又ハ第三條第一項ノ規定ニ依リ合金鑛產物ノ買入ノ免許ヲ受ケタル者ニ對シ政府ノ指定スル者ヨリ合金鑛產物ヲ買入ルベキコトヲ命ズルコトヲ得

第三條 金製鍊業ヲ營マントスル者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ政府ノ免許ヲ受クベシ、業トシテ合金鑛產物ノ買入ヲ爲サントスル者亦同シ

前項ノ免許ヲ受ケ金製鍊業ヲ營ム者ハ之ヲ金製鍊業者ト稱ス

金製鍊業者又ハ第一項ノ規定ニ依リ合金鑛產物ノ買入ノ免許ヲ受ケタル者ニ非ザレバ合金鑛產物ヲ讓受クルコトヲ得ズ

但シ命令ヲ以テ定ムル場合ハ此ノ限ニアラズ

第四條 金製鍊業者其ノ事業ヲ廢止シ又ハ休止セントスルトキハ政府ノ許可ヲ受クベシ

金製鍊業ノ讓渡又ハ金製鍊業ヲ營ム會社ノ合併若ハ解散ノ決議若ハ總社員ノ同意ハ政府ノ認可ヲ受クルニ非ザレバ其ノ効力ヲ生ゼズ相續人ガ被相續人ノ金製鍊業ヲ承繼シタルトキハ相續人ハ金製鍊業ノ免許ヲ受ケタル者ト看做ス此ノ場合ニ於テハ相續人ハ命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ旨ヲ政府ニ届出ヅベシ

第五條 金製鍊業者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ事業計畫ヲ定メ之ヲ政府ニ届出ヅベシ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

政府ハ必要アリト認ムルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ事業計畫ノ變更ヲ命ズルコトヲ得

第六條 政府ハ産金ノ増加ヲ圖ル爲必要アリト認ムルトキハ金製鍊業者ニ對シ製鍊設備ノ擴張、改良其ノ他製鍊設備ニ關シ必要ナル事項ヲ命ズルコトヲ得

第七條 金鑛ヲ目的トスル鑛業權者又砂金ヲ目的トスル砂鑛權者（以下金鑛業者ト總稱ス）ハ命令ノ定ムル所ニ依リ事業計畫ヲ定メ之ヲ政府ニ届出ヅベシ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ政府ハ必要アリト認ムルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ事業計畫ノ變更ヲ命ズルコトヲ得

第八條 政府ハ産金ノ増加ヲ圖ル爲必要アリト認ムルトキハ金鑛業者ニ對シ探鑛掘採採取又ハ選鑛ニ付設備ノ新設擴張改良其ノ他必要ナル事項ヲ命ジ又ハ製鍊設備ノ新設ヲ命ズルコトヲ得

前項ノ規定ニ依ル命令ニ依リ製鍊設備ノ新設ヲ爲シタル者ハ金製鍊業者ト看做ス

第九條 政府ハ公益上必要アリト認ムルトキハ金鑛業者、金製鍊業者又ハ第三條第一項ノ規定ニ依リ含金鑛產物ノ買入ノ免許ヲ受ケタル者ニ對シ含金鑛產物ノ取引ニ關シ必要ナル事項ヲ命ズルコトヲ得

第十條 政府ハ金鑛業者、金製鍊業者又ハ第三條第一項ノ規定ニ依リ含金鑛產物ノ買入ノ免許ヲ受ケタル者ニ對シ其ノ業務及財産ノ狀況ニ關シ報告ヲ徴シ又ハ検査ヲ爲スコトヲ得

政府ハ金鑛業者、金製鍊業者又ハ第三條第一項ノ規定ニ依リ含金鑛產物ノ買入ノ免許ヲ受ケタル者ニ對シ其ノ業務及會計ニ關シ監督上必要ナル命令ヲ發シ又ハ處分ヲ爲スコトヲ得

第十一條 政府ハ必要アリト認ムルトキハ金ノ價格又ハ金ノ使用ノ制限其ノ他金ノ使用ニ關シ必要ナル命令ヲ發スルコトヲ得

第十一條ノ二 政府ハ必要アリト認ムルトキハ左ニ掲グル物ヲ所有スル者ニ對シ命令ノ定ムル所ニ依リ之ガ處分ニ關シ禁止若ハ制限ヲ爲シ又ハ之ヲ政府若ハ政府ノ指定スル者ニ賣却スベキコトヲ命ズルコトヲ得

一 金 地 金

二 金ノ合金ニシテ命令ノ定ムル種類ノモノ

三 金ヲ主タル材料トスル物ニシテ命令ノ定ムル種類ノモノ政府ハ必要アリト認ムルトキハ金貨幣ヲ所有スル者ニ對シ命令ノ定ムル所ニ依リ之ガ處分ニ關シ禁止又ハ制限ヲ爲シ又ハ金ヲ鑄潰シ依リテ得タル金地金ヲ政府若ハ政府ノ指定スル者ニ賣却スベキコトヲ命ズルコトヲ得

第十一條ノ三 前條ノ規定ニ依リテ政府ノ爲ス金地金、金ノ合金又ハ金ヲ主タル材料トスル物ノ買入ハ金資金ノ運用ニ屬スルモノトス

第十一條ノ四 第十一條ノ二ノ規定ニ依リ政府又ハ政府ノ指定スル者ニ賣却スベキコトヲ命ジタル場合ノ賣却價格ハ金地金ニ在リテハ其ノ物ノ中ニ含まル金ノ純量ニ付第一條第一項ノ規定ニ依リ政府ガ金地金ヲ買上グル場合ノ買上價格ニ依リ算出シタル金額トシ金ノ合金又ハ金ヲ主タル材料トスル物ニ在リテハ金委員會ノ定ムル所ニ依ル

第十一條ノ五 第十一條ノ二第一項第三號ノ規定ニ依リ金ヲ主タル材料トスル物ヲ政府又ハ政府ノ指定

スル者ニ賣却スベキコトヲ命ジタル場合ニ於テ其ノ物ガ美術品、骨董品、工藝品其ノ他ノ物ニシテ
鑄潰スルコトヲ適當トセザルモノナルトキハ其ノ物ヲ所有スル者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ政府ノ許
可ヲ受ケ之ヲ賣却セザルコトヲ得

第十二條 政府ハ命令ノ定ムル所ニ依リ金貨幣、金地金、金ノ合金又ハ金ヲ主タル材料トスル物ノ取得
處分又ハ所有ニ關シ報告ヲ徴シ又ハ検査ヲ爲スコトヲ得

第十三條 鑛業法第五十條乃至第七十條、第九十二條、第九十三條、第九十九條第一項、第三百三條及第
百四條ノ規定ハ金鑛業者ニ非ザル金製鍊業者ニ關シ之ヲ準用ス

第十四條 政府ハ第二條、第六條、第八條第一項、第九條、第十一條又ハ第十一條ノ二ノ規定ニ依ル命
令ヲ爲サントスルトキハ金委員會ノ議ヲ經ベシ

第十五條 金鑛業者又ハ金製鍊業者其ノ事業ノ爲必要ナル器具機械其ノ他ノ材料ヲ政府ノ認可ヲ受ケ輸
入スルトキハ本法施行ノ日ヨリ五年間命令ノ定ムル所ニ依リ輸入税ヲ免除ス(×朝鮮産金令ニハ此
ノ項ナシ)

第十六條 政府ハ命令ノ定ムル所ニ依リ金鑛業者及金製鍊業者ニ對シ獎勵金ヲ交付スルコトヲ得

第十七條 詐欺ノ行爲ヲ以テ前條ノ獎勵金ノ交付ヲ受ケタル者ニ對シテハ其ノ金額ノ返還ヲ命ズ
前項ノ規定ニ依リ返還金ハ國稅滯納處分ノ例ニ依リ之ヲ徵收スルコトヲ得但シ先取特權ノ順位ハ國
稅ニ次グモノトス

第十八條 金製鍊業者又ハ第三條第一項ノ規定ニ依リ合金鑛產物ノ買入ノ免許ヲ受ケタル者本法若ハ本
法ニ基キテ發スル命令ニ違反シ又ハ政府ノ命ジタル事項ヲ執行セザルトキハ政府ハ其ノ業務ヲ停止

シ若ハ制限シ、第三條第一項ノ許可ヲ取消シ又ハ法人ノ役員ノ解任ヲ爲スコトヲ得

第十九條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ五千圓以下ノ罰金ニ處ス但シ當該金地金、金ノ合金、金ヲ主
タル材料トスル物又ハ合金鑛物ノ價額ノ三倍ガ五千圓ヲ超ユルトキハ罰金ハ其ノ價額ノ三倍以下トス

一 第一條第一項ノ規定ニ基キテ發スル命令ニ違反シテ金地金ヲ政府ニ賣却セザル者

二 第一條第一項ノ規定ニ違反シテ金地金ヲ政府以外ノ者ニ讓渡シタル者

三 第一條第一項ノ規定ニ違反シテ金製鍊業者及第三條第一項ノ規定ニ依リ合金鑛產物ノ買入ノ免
許ヲ受ケタル者以外ノ者ニ合金鑛產物ヲ讓渡シタル者

四 第三條第一項ノ規定ニ違反シテ合金鑛產物ヲ買入レ又ハ同條第三項ノ規定ニ違反シタル者

五 第十一條ノ二ノ規定ニ依ル禁止又ハ制限ニ違反シタル者

六 第十一條ノ二ノ規定ニ依ル命令ニ違反シテ金地金、金ノ合金又ハ金ヲ主タル材料トスル物ヲ政
府又ハ政府ノ指定スル者ニ賣却セザル者

第二十條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ五千圓以下ノ罰金ニ處ス

一 第二條第一項ノ規定ニ依ル命令ニ違反シテ合金鑛產物ヲ政府ノ指定シタル者以外ノ者ニ讓渡シ
タル者

二 第三條第一項ノ規定ニ違反シテ金ノ製鍊ヲ爲シタル者

三 第九條ノ規定ニ依ル命令ニ違反シタル者

四 第十一條ノ規定ニ基キテ發スル命令ニ違反シタル者

第二十一條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ二千圓以下ノ罰金ニ處ス

一 第四條第一項ノ規定ニ違反シテ事業ヲ廢止シ又ハ休止シタル者

- 二 第五條第一項又ハ第七條第一項ノ規定ニ違反シテ事業計畫ノ届出ヲ爲サズ又ハ届出デタル事業計畫ヲ實施セザル者
- 三 第五條第二項又ハ第七條第二項ノ規定ニ依ル變更命令ニ違反シテ事業計畫ヲ實施シタル者
- 四 第六條又ハ第八項ノ規定ニ依ル命令ニ違反シタル者
- 第二十二條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス
 - 一 第四條第三項ノ規定ニ違反シテ届出ヲ爲サザル者
 - 二 第十條第一項又ハ第十二條ノ規定ニ依ル報告ヲ爲サズ、虚偽ノ報告ヲ爲シ又ハ検査ヲ拒ミ、妨ゲ若ハ忌避シタル者
 - 三 第十條第二項ノ規定ニ依ル命令又ハ處分ニ違反シタル者
- 第二十三條 法人ノ代表者又ハ法人若ハ人ノ代理人、使用人其ノ他ノ従業者ガ其ノ法人又ハ人ノ業務ニ關シテ第十九條乃至前條ノ違反行爲ヲ爲シタルトキハ行爲者ヲ罰スルノ外其ノ法人又ハ人ニ對シ亦第十九條乃至前條ノ罰金刑ヲ科ス

附 則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム（昭和十二年八月勅令第四百五十三號ヲ以テ同年八月二十五日ヨリ施行）

本法施行ノ際現ニ含金鑛產物ヲ所有スル者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ本法施行ノ日ニ之ヲ取得シタル者ト看做ス

本法施行ノ際現ニ金製鍊業ヲ營ム者又ハ其ノ事業ヲ繼承シタル者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ本法施行ノ日ヨリ二月ヲ限リ第三條第一項ノ規定ニ拘ラズ其ノ事業ヲ營ムコトヲ得

前項ニ掲グル者前項ノ期間内ニ金製鍊業ノ免許ヲ申請シタル場合ニ於テ其ノ申請ニ對スル許否ノ處分ノ日迄亦前項ニ同ジ

註 ×印朝鮮總督府令ニヨルモノトノ重要ナル相異點ノミヲ示ス 以下同ジ

② 産金法施行令（昭和十二年八月二十四日勅令第四百五十四號）

- 第一條 産金法第一條第一項ノ含金鑛物トハ金鑛、金銀鑛、金銀銅其ノ他ノ金ヲ含ム鑛物（鑛滓ヲ含ム）ニシテ工業上金ヲ採取シ得ルモノヲ謂フ
- 第二條 産金法第一條第一項ノ製鍊ノ過程ニ在ル合金物トハ左ノ各號ニ掲グル物ヲ謂フ
 - 一 粗銅、粗鉛、濃物、アマलगム其ノ他ノ製鍊ノ過程ニ於テ生ズル金ヲ含ム物ニシテ工業上金ヲ採取シ得ルモノ
 - 二 金及銀ヲ主タル成分トスル地金ニシテ含金鑛物、砂金又ハ前號ニ掲グル物ヨリ新ニ製成シタルモノ（以下之ヲ粗金銀地金ト稱ス）
- 第三條 産金法第一條第一項ノ規定ハ左ノ各號ノ一ニ該當スル場合ニハ之ヲ適用セズ
 - 一 當該含金鑛產物ヲ學術研究、試験又ハ標本ノ用ニ供スルトキ
 - 二 政府ノ許可ヲ受ケタルトキ
 - 三 朝鮮産金令第三條第一項ノ規定ニ依リ含金鑛產物ノ買入ノ免許ヲ受ケタル者ガ製鍊ノ爲當該鑛產物ヲ移出スルトキ
- 第四條 粗金銀地金ヲ製成シタル者又ハ之ヲ讓受ケタル者ハ之ヲ品位千分中金九百九十以上ノ金地金ニ

製成シ又ハ之ガ精製ヲ造幣局ニ依頼シ大藏大臣ノ定ムル所ニ依リ政府ニ賣却スベシ但シ租金銀地金ノ製成高及讓受高ノ合計中ニ含マル、純金量ガ毎月一疋ヲ超エザル者ハ産金法第一條第一項後段ノ規定ニ依リ之ヲ賣却スルコトヲ妨ゲズ

前項ノ規定ニ依リ金地金ヲ政府ニ賣却スベキ期間ハ精製完了ノ時又ハ造幣局ニ精製ヲ依頼シタル時ヨリ一月内トス

金銀地金精製及品位證明規則第十二條ノ規定ニ依リ地金ノ輸納ヲ受理セズ又ハ其ノ受理ヲ停止スル場合ニ於テハ其ノ期間ハ前項ノ期間中ヨリ之ヲ除算ス

第五條 金地金ノ買上價格ハ大藏大臣之ヲ定ム
(註、朝鮮銀行ニ對スル金地金ノ賣渡價格ニ關シテハ朝鮮總督之ヲ定ム)

第六條 産金法第三條第一項ノ規定ニ依リ金製鍊業ヲ營マントスル者又ハ業トシテ含金礦物ノ買入ヲ爲サントスル者ハ商工大臣ノ免許ヲ受ケベシ

商工大臣前項後段ノ規定ニ依リ業トシテ租金銀地金又ハ合金アマルガムノ買入ヲ爲スコトヲ免許セ

第七條 産金法第三條第一項ノ金製鍊業ノ免許ハ製鍊場毎ニ之ヲ爲シ業トシテ含金礦産物ノ買入ヲ爲スコトノ免許ハ目的物ヲ限定シテ之ヲ爲スモノトス

金ノ精製ノミヲ爲ス者ハ其ノ精製ニ限り金製鍊業者トシテ免許ヲ受クルコトヲ要セズ

第八條 産金法第三條第三項本文ノ規定ハ左ノ各號ノ一ニ該當スル場合ニハ之ヲ適用セズ
一 當該含金礦産物ヲ學術研究、試験又ハ標本ノ用ニ供スルトキ

二 政府ノ許可ヲ受ケタルトキ

第九條 産金法第五條第一項ノ事業計畫ハ製鍊場毎ニ、同法第七條第一項ノ事業計畫ハ鑛山毎ニ之ヲ定メ商工大臣ニ届出ツベシ

第十條 産金法第十五條ノ規定ニ依リ輸入税ノ免除ヲ受ケタルコトヲ得ベキ器具、機械其ノ他ノ材料ハ金製鍊業又ハ金製鍊業ノ爲必要ナル物品ニシテ豫メ商工大臣ノ認可ヲ受ケタルモノニ限ル

前項ノ物品ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十一條 産金法第十五條ノ規定ニ依リ輸入税ノ免除ヲ受ケントスル者ハ輸入申告書ニ前條第一項ノ認可ヲ受ケタルコトヲ證スル書類ヲ添付スベシ

第十二條 輸入税ノ免除ヲ受ケタル物品ヲ産金法第十五條ノ規定ニ依リ輸入税ノ免除ヲ受ケタルコトヲ得ベキ他ノ用途ニ供セントスル場合ニ於テハ商工大臣ノ認可ヲ受ケ其ノ旨ヲ税關ニ申告スルコトヲ要ス

第十三條 輸入税ノ免除ヲ受ケタル物品ヲ輸入ノ日ヨリ一年内ニ輸入ノ目的タル用途又ハ前條ノ規定ニ依ル他ノ用途ニ供セザルトキハ其ノ輸入税ヲ追徴ス但シ己ムコトヲ得ザル事由ニ依リ其ノ期間ノ延長ニ付商工大臣ノ認可ヲ受ケ其ノ旨ヲ税關ニ申告シタルトキハ此ノ限ニ在ラズ

附 則

本令ハ産金法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス(昭和十二年八月二十五日ヨリ施行)
産金法施行ノ際現ニ金鑛業又ハ金製鍊業ヲ營ム者以外ノ者含金礦産物ヲ所有スルトキハ産金法附則第

二項ノ規定ハ之ヲ適用セズ

③ 産金買上規則

(昭和十二年八月二十四日 大藏省令第三十二號
昭和十三年五月 大藏省令第二十五號
昭和十四年三月三十一日 大藏省令第八號改正)

- 第一條 産金法第一條第一項ノ規定ニ依リ政府ニ賣却スベキ金地金ノ買上ニ關スル事務ハ金資金特別會計法第四條ノ規定ニ依リ日本銀行ノ本店又ハ支店ヲシテ之ヲ取扱ハシム
- 第二條 産金法第一條第一項ノ規定ニ依リ政府ニ賣却スベキ金地金ハ品位千分中九百九十以上ノモノタルコトノ造幣局ノ證明アルモノニ限ル
- 第三條 産金法第一條第一項ノ規定ニ依リ金地金ヲ政府ニ賣却スベキ者精製シタル金地金ニ付造幣局ノ證明ヲ受ケントスル場合ニ於テハ金地金輸納ノ際政府ニ賣却スベキ金地金ナル旨並ニ當該金地金ノ買上代金ヲ支拂ヲ受ケントスル日本銀行ノ本店又ハ支店ヲ申告スベシ
- 前項ノ申告アリタル場合ニ於テ造幣局ハ品位試験ノ上金地金ノ品位千分中金九百九十以上ノモノタルコトヲ認メタルトキハ輸納人ニ對シ金銀地金精製及品位證明規則第三條ノ規定ニ依リ交付シタル地金預リ證書ト引換ニ輸納地金中ノ純金量ヲ記載シタル買上金地金預リ證書ヲ交付スベシ
- 第四條 産金法第一條第一項ノ規定ニ依リ金地金ヲ政府ニ賣却スベキ者地金ノ精製ヲ造幣局ニ依頼スル場合ニ於テハ地金輸納ノ際精製ニ依リ生ズベキ金地金ヲ政府ニ賣却スベキ旨並ニ當該金地金ノ買上代金ノ支拂ヲ受ケントスル日本銀行ノ本店又ハ支店ヲ申告スベシ
- 前項ノ申告アリタル場合ニ於テ造幣局ハ品位試験ノ上輸納人ニ對シ輸納地金中ノ純金量ヲ記載シタル買上金地金預リ證書ヲ交付スベシ

第五條 産金法第一條第一項ノ規定ニ依リ金地金ヲ政府ニ賣却スベキ者ハ産金法施行令第四條第二項ノ期間内ニ第三條又ハ前條ノ規定ニ依リ申告シタル日本銀行ノ本店又ハ支店ニ買上金地金預リ證書ヲ提出シテ當該證書ニ表示セラルル金地金ノ買上ヲ請求スベシ

日本銀行ノ本店又ハ支店前項ノ請求ヲ受ケタルトキハ買上金地金預リ證書ト引換ニ買上代金ヲ支拂フベシ

第六條 第三條又ハ第四條ノ規定ニ依リ地金ヲ輸納シタル者買上地金預リ證書ヲ滅失又ハ紛失シタルトキハ造幣局ニ對シ其ノ再交付ヲ申請スルコトヲ得

第七條 本令ハ産金法以外ノ法令ニ依リ金地金ヲ政府ニ賣却スベキ場合ニ之ヲ準用ス産金法其ノ他ノ法令ニ依リ政府ニ賣却スベキ金地金以外ノ金地金ヲ政府ニ賣却セントスル者アルトキ政府ガ之ヲ買上グル場合亦同ジ

第八條 本令ハ銀地金ヲ政府ニ賣却セントスル者アルトキ政府ガ之ヲ買上グル場合ニ之ヲ準用ス

前項ノ場合ニ於テハ本令中金地金トアルハ銀地金、品位千分中九百九十以上トアルハ品位千分中銀九百九十以上純金量トアルハ純銀量、買上金地金預リ證書トアルハ買上銀地金預リ證書トス

附 則

本令ハ昭和十二年八月二十五日ヨリ施行ス
本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス(昭和十四年三月三十一日)

④ 產金法第十二條ノ規定ニ基ク命令ノ件 (昭和十三年五月二十六日) (大藏省令第二十九號)

- 第一條 大藏大臣ハ必要アリト認ムルトキハ別ニ定ムルモノノ外事項及人ヲ指定シ金貨幣、金地金、金ノ合金又ハ金ヲ主タル材料トスル物ノ取得、處分及保有ニ關シ報告ヲ徵スルコトヲ得
 - 第二條 大藏大臣ハ必要アリト認ムルトキハ前條ノ規定ニ依リ報告ヲ爲スベキ者ノ申請ニ基キ其ノ報告ヲ免除又ハ報告期限ヲ延長スルコトヲ得
 - 第三條 大藏大臣ハ必要アリト認ムルトキハ部下ノ官吏ヲシテ金貨幣、金地金、金ノ合金又ハ金ヲ主タル材料トスル物ノ取得、處分及保有ニ關シ帳簿其ノ他ノ検査ヲ爲サシムルコトヲ得
- 前項ノ規定ニ依ル検査ヲ爲ス場合ニ於テハ當該官吏ハ其ノ身分ヲ示ス證票ヲ携帯スベシ

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

⑤ 政府ニ賣却スベキ金地金買上價格 (昭和十三年五月二日) (大藏省告示第二百二十一號)

產金法第一條第一項ノ規定ニ依リ政府ニ賣却スベキ金地金ノ買上價格產金法施行令第五條ノ規定ニ依リ左ノ通定メ昭和十三年五月二日ヨリ之ヲ施行ス

純金ノ量目一グラムニ付 三圓八十五錢

昭和十二年八月大藏省告示第二百十九號ハ本告示施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

(註、朝鮮銀行ニ於ケル金地金賣渡價格ハ一グラムニ付三圓八十九錢)

⑥ 產金獎勵規則 (昭和十五年四月十九日改正) (商工省令第二十三號)

- 第一條 商工大臣ハ本則ニ依リ金鑛業者又ハ金製鍊業者ニ對シ探鑛又ハ選鑛場若ハ製鍊場ノ設置ニ付毎年度豫算ノ範圍内ニ於テ獎勵金ヲ交付シ又ハ金鑛業者ニ對シ探鑛ノ爲鑿岩用機械器具類ヲ貸與ス
- 第二條 探鑛獎勵金ノ額ハ坑道掘鑿ニ要シタル費用ノ半額以内ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スル金額ヲ限度トス
 - 一 水平坑道 (三十度未滿ノ傾斜ヲ有スル斜坑ヲ含ム) ニ在リテハ延長一メートルニ付三十圓
 - 二 豎坑 (三十度以上ノ傾斜ヲ有スル斜坑ヲ含ム) ニ在リテハ延長一メートルニ付九十圓
 - 三 金鑛ヲ目的トスル試錐ニアリテハ延長一米ニ付二十圓
 - 四 砂金ヲ目的トスル試錐ニ在リテハ錐孔一本ニ付十五圓
- 第三條 選鑛場又ハ製鍊場ノ設置ニ付交付スル獎勵金ノ額ハ其ノ設置ニ要シタル費用ノ七割以内トス
- 第四條 探鑛獎勵金ノ交付ヲ受ケントスル者ハ様式第一號ニ依ル申請書ヲ商工大臣ニ提出スベシ
- 第五條 選鑛場又ハ製鍊場ノ設置ニ付獎勵金ノ交付ヲ受ケントスル者ハ様式第二號ニ依ル申請書ヲ商工大臣ニ提出スベシ
- 第六條 獎勵金交付ノ指令ヲ受ケタル者前二條ノ申請書ニ記載シタル事項ヲ變更セントスル時ハ豫メ商工大臣ノ承認ヲ受クベシ
- 第七條 獎勵金ハ探鑛作業ガ豫定ノ延長ニ達シ又ハ選鑛場若ハ製鍊場ノ設置工事完成シタル後之ヲ交付ス但シ特別ノ事由アルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第八條 獎勵金ハ其ノ交付ヲ受ケタル目的以外ニ之ヲ使用スルコトヲ得ズ

第九條 探鑛獎勵金交付ノ指令ヲ受ケタル者ハ探鑛日誌ヲ備ヘ、探鑛日誌ニハ掘鑿ノ狀況及地質鑛床ノ状態ヲ記載スベシ

第十條 選鑛場又ハ製鍊場ノ設置ニ付獎勵金交付ノ指令ヲ受ケタル者ハ工事日誌、工事費支出簿及設備臺帳ヲ備ヘ工事日誌ニハ工事ノ狀況ヲ、工事費支出簿ニハ工事ニ關スル支出ヲ、設備臺帳ニハ設置シタル機械器具其ノ他ノ設備ヲ記載スベシ、工事費支出簿ニ記載シタル支出ニ付テハ之ヲ證スルニ足ル書類ヲ備ヘ置クベシ

第十一條 獎勵金交付ノ指令ヲ受ケタル者ハ探鑛日誌又ハ工事日誌ニ基キ毎月十日迄ニ其ノ前月分ノ掘鑿ノ狀況及地質鑛床ノ状態又ハ工事ノ狀況ニ關シ様式第三號、様式第四號又ハ様式第五號ニ依ル報告書ヲ商工大臣ニ提出スベシ

第十二條 重大ナル事故ニ因リ探鑛作業又ハ選鑛場若ハ製鍊場ノ設置工事ニ支障ヲ來シタルトキハ獎勵金交付ノ指令ヲ受ケタル者其ノ概要ヲ遲滞ナク商工大臣ニ報告スベシ

第十三條 獎勵金交付ノ指令ヲ受ケタル者探鑛作業又ハ選鑛場若ハ製鍊場ノ設置工事ヲ休止シ又ハ廢止セントスルトキハ豫メ商工大臣ノ承認ヲ受クベシ

第十四條 獎勵金交付ノ指令ヲ受ケタル者鑛業權、砂鑛權又ハ金製鍊業ヲ移轉シ承繼人ニ於テ探鑛作業又ハ選鑛場若ハ製鍊場ノ設置工事ヲ繼續セントスル時ハ當事者連署ノ上商工大臣ノ承認ヲ受クベシ

第十五條ノ一 獎勵金ノ交付ヲ受ケテ設置シタル選鑛場又ハ製鍊場ハ工事完成ノ日ヨリ五年間ハ商工大臣ノ承認ヲ受ケルニ非ザレバ之ヲ讓渡スルコトヲ得ズ

第十五條ノ二 獎勵金ノ交付ヲ受ケテ設置シタル選鑛場ノ事業主ハ工事完成ノ日ヨリ五年間、毎月ノ事

業ノ狀況ニ關シ様式第六號ニ依ル事業月報ヲ翌月十五日迄ニ商工大臣ニ提出スベシ

前項ノ事業主前項ノ期間内ニ其ノ事業ヲ廢止又ハ休止シタルトキハ遲延ナクソノ旨ヲ商工大臣ニ届出ヅベシ其ノ休止シタル事業ヲ再ビ開始シタルトキ亦同ジ

前項ノ廢止又ハ休止ノ届書ニハソノ事由及休止ノ期間ヲ記載スベシ

第十六條 商工大臣必要アリト認ムルトキハ探鑛獎勵金交付ノ指令ヲ受ケタル者ニ對シ探鑛作業ノ中止又ハ探鑛作業計畫ノ變更ヲ命ズルコトアルベシ

第十七條 探鑛作業ガ豫定ノ延長ニ達シ又ハ選鑛場若ハ製鍊場ノ設置工事完成シタルトキハ遲滞ナク其ノ旨ヲ商工大臣ニ届出ヅベシ

第十八條 獎勵金交付ノ指令ヲ受ケタル者獎勵金ノ交付ヲ受ケントスルトキハ様式第七號又ハ様式第八號ニ依ル申請書ヲ商工大臣ニ提出スベシ

第十九條 商工大臣必要アリト認ムルトキハ獎勵金交付ノ指令ヲ受ケタル者ニ對シ其ノ探鑛作業、選鑛場若ハ製鍊場ノ設置工事又ハ會計ニ關シ報告ヲ爲サシメ書類、帳簿又ハ探鑛作業若ハ工事ノ狀況ノ検査ヲ爲スコトアルベシ

第二十條 金鑛業者鑿岩用機械器具類ノ貸與ヲ受ケントスルトキハ様式第九號ニ依ル申請書ヲ商工大臣ニ提出スベシ

貸與スベキ鑿岩用機械器具類ハ商工大臣之ヲ告示ス

第二十一條 獎勵金交付ノ指令ヲ受ケタル者又ハ獎勵金ノ交付ヲ受ケタル者左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ商工大臣ハ獎勵金交付ノ指令ヲ取消シ、獎勵金ノ額ヲ減少シ又ハ既ニ交付シタル獎勵金ノ全部若ハ一部ノ返還ヲ命ズルコトアルベシ

- 一 本則又ハ本則ニ基キテ命ジタル事項ニ違反シタルトキ
 - 二 獎勵金交付ノ條件ニ違反シタルトキ
 - 三 探鑛作業計畫又ハ選鑛場若ハ製鍊場ノ設置工事計畫ヲ變更シタルトキ
 - 四 探鑛作業又ハ選鑛場若ハ製鍊場ノ設置工事ヲ休止シ又ハ廢止シタルトキ
 - 五 探鑛作業中止ノ命令ヲ受ケタルトキ
 - 六 不正ノ行爲又ハ怠慢アリタルトキ
 - 七 探鑛費又ハ選鑛場若ハ製鍊場ノ設置工事ノ支出額ガ豫算額ニ比シ著シク相違スルトキ
- 第二十二條 鑿岩用機械器具類ノ貸與ヲ受ケタル者貸與ニ付不正ノ行爲アリタルトキ又ハ貸與ノ條件ニ違反シタルトキハ返還其ノ他必要ナル事項ヲ命ズルコトアルベシ
- 第二十三條 本則ノ規定ニ依リ商工大臣ニ提出スル書類ハ金鑛業者ヨリ提出スル場合ニ於テハ其ノ鑛山ノ所在地ヲ管轄スル鑛山監督局長ヲ經由スベシ

附 則

本則ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

附 則 (昭和十四年商工省令第十六號)

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行前探鑛獎勵金交付ノ指令ヲ受ケタル者及探鑛獎勵金ノ交付ヲ受ケタル者ニ付テハ仍從前ノ例ニヨル

⑦ 増産金買上規則 (昭和十五年四月一日施行) (大藏省令第二十九號)

- 第一條 政府ハ當分ノ内金鑛山(砂金鑛區ヲ含ム以下同ジ)ノ左ニ掲グル期間中ノ産金量ガ基準産金量ヲ超エタル場合ニ於テハ基準産金量ヲ超ユル部分ニ付第二條乃至第七條、第十五條及第十六條ノ規定ニ依リ買上價格ヲ割増ス但シ當該期間中ノ産金量ガ五百瓦ニ達セザル金鑛山ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ
- 一 毎年一月一日以降六月三十日迄(以下之ヲ上期ト稱ス)
 - 二 毎年七月一日以降十二月三十一日迄(以下之ヲ下期ト稱ス)
- 第二條 前條ノ割増金額ハ基準産金量ヲ超ユル數量ノ内基準産金量ニ對スル一定割合ヲ超ユル部分ニ付テハ一瓦當二圓、同割合以內ノ部分ニ付テハ一瓦當一圓トス
- 前項ノ基準産金量ニ對スル一定割合ハ毎年一月大藏大臣之ヲ定ム
- 第三條 本令ニ於テハ産金量及基準産金量ハ金鑛山毎ニ之ヲ算定スルモノトス
- 第四條 本令ニ於テ産金量トハ當該期間中ニ金鑛山ヨリ産出シタル金地金又ハ含金鑛産物ノ中ニ含まルル金ノ純量ヲ謂ヒ自山製鍊ヲ爲ス場合ニ於テハ其ノ製鍊シタル金地金又ハ含金鑛産物ノ中ニ含まルル金ノ純量ニ依リ、含金鑛産物ヲ賣却又ハ送致スル場合ニ於テハ其ノ賣却又ハ送致シタル含金鑛産物ノ中ニ含まルル金ノ純量ニ依リ之ヲ算出ス
- 第五條 本令ニ於テ基準産金量トハ左ニ掲グルモノヲ謂フ
- 一 昭和十三年上期中期ヨリ引續キ稼行シ金ヲ産出シタル金鑛山ノ各年上期分ニ付テハ昭和十三

年上期中ノ産金量

二 昭和十三年下期中期首ヨリ引續キ稼行シタル金鑛山ノ各年下期分ニ付テハ昭和十三年下期中ノ産金量

三 前各號ニ該當セザル金鑛山ノ基準産金量ニ付テハ其ノ金鑛業者ノ申請ニ依リ大藏大臣ノ指定スル數量但シ内地所在金鑛山ニ在リテハ産金量届出規則第二條第二項第三號、朝鮮所在金鑛山ニ在リテハ朝鮮産金量届出規則第二條第二項第三號、臺灣所在金鑛山ニ在リテハ臺灣産金量届出規則第二條第二項第三號ノ規定ニ依リ指定ヲ受ケタル數量トス

大藏大臣ハ天災事變其ノ他特別ノ事情ニ依リ必要アリト認ムルトキハ前項ノ基準産金量ヲ變更スルコトヲ得但シ内地所在金鑛山ニ在リテハ産金量届出規則第二條第三項、朝鮮所在金鑛山ニ在リテハ朝鮮産金量届出規則第二條第三項、臺灣所在金鑛山ニ在リテハ臺灣産金量届出規則第二條第三項ノ定ムル所ニ依ル

第六條 第一條ノ割増金(以下之ヲ第一種割増金ト稱ス)ハ二期ニ分チ第一條各號ニ掲グル期間中ノ産金量ガ基準産金量ヲ超エタル金鑛山ノ金鑛業者ニ之ヲ交付ス

第七條 第一種割増金ノ交付ヲ受ケントスル者ハ當該金鑛山ニ付左ニ掲グル事項ヲ記載シタル割増金交付申請書ヲ上期分ニ付テハ九月十日迄ニ、下期分ニ付テハ三月十日迄ニ最寄ノ日本銀行ノ本店、支店、京城代理店又ハ臺北代理店ヲ經テ大藏大臣ニ提出スベシ

- 一 申請者ノ住所、電話番号及氏名又ハ商號
- 二 會社ニ在リテハ代表者ノ氏名
- 三 金鑛山ノ名稱、鑛區番號及所在地

四 割増金額及其ノ算出ノ根據

五 基準産金量

六 期中ノ月別産金量

七 日本銀行ノ本店、支店、京城代理店又ハ臺北代理店中割増金ノ交付ヲ受ケントスル店舗ノ名稱

八 其ノ他參考トナルベキ事項

前項ノ申請書ニハ左ニ掲グル書類ヲ添付スベシ但シ本令ニ依リ既ニ提出シタル他ノ申請書ニ添付シタルトキハ其ノ旨ヲ明記シ之ヲ省略スルコトヲ得

一 内地所在金鑛山ニ關シテハ産金量届出規則第三條、朝鮮所在金鑛山ニ關シテハ朝鮮産金量届出規則第三條、臺灣所在金鑛山ニ關シテハ臺灣産金量届出規則第三條ノ産金増加量届出書寫及添付書類

二 會社ニ在リテハ株主又ハ之ニ準スベキ者ノ名簿

三 會社ニ在リテハ最終ニ決定シタル事業年度ノ財産目錄、貸借對照表、損益計算書及利益金處分ニ關スル書類個人ニ在リテハ之ニ準ズベキモノ

第八條 政府ハ當分ノ内産金ノ確保ヲ圖ル爲必要アリト認ムルトキハ金鑛業者ノ申請ニ依リ金鑛山ヲ指定シ其ノ産金ニ付第九條乃至第十六條ノ規定ニ依リ買上價格ヲ割増スルコトヲ得

第九條 前條ノ割増金額ハ一瓦當一圓トス但シ當該金鑛山ニ於ケル金鑛ノ品位、性質、鑛床ノ狀況其ノ他ノ生産條件ニ依リ之ヲ一瓦當五十錢迄減額シ又ハ一瓦當二圓迄増額スルコトアルモノトス

第十條 金鑛山ニ付第八條ノ指定ヲ受ケントスル者ハ左ニ掲グル事項ヲ記載シタル金鑛山指定申請書ヲ大藏大臣ニ提出スベシ

- 一 申請者ノ住所、電話番号及氏名又ハ商號
 - 二 會社ニ在リテハ代表者ノ氏名
 - 三 金鑛山ノ名稱、鑛區番號及所在地
 - 四 金一瓦當生産費及其ノ算出ノ根據
 - 五 金鑛ノ品位、性質、鑛床ノ狀況其ノ他生産條件ヲ知ルニ足ル事項
- 前項ノ申請書ニハ左ニ掲グル書類ヲ添附スベシ但シ本令ニ依リ既ニ提出シタル他ノ申請書ニ添附シタルトキハ其ノ旨ヲ明記シ之ヲ省略スルコトヲ得
- 一 會社ニ在リテハ定款及株主又ハ之ニ準ズベキ者ノ名簿
 - 二 會社ニ在リテハ最終ニ決定シタル事業年度ノ財産目録、貸借對照表、損益計算書及利益金處分ニ關スル書類個人ニ在リテハ之ニ準ズベキモノ
- 第十一條 前條ノ申請ヲ爲シタル者ニ付第八條ノ指定アリタルトキハ申請ノ日迄遡り買上價格ノ割増ヲ爲スコトヲ得
- 第十二條 政府ハ金鑛山ノ狀況ニ依リ必要アリト認ムルトキハ第八條ノ指定ヲ取消シ又ハ割増金額ヲ變更スルコトヲ得
- 第十三條 第八條ノ割増金(以下之ヲ第二種割増金ト稱ス)ハ上期及下期ノ二期ニ分チ同條ノ指定ヲ受ケタル金鑛山ノ鑛業者ニ之ヲ交付ス
- 第十四條 第二種割増金ノ交付ヲ受ケントスル者ハ左ニ掲グル事項ヲ記載シタル割増金交付申請書ヲ上期分ニ付テハ九月十日迄ニ、下期分ニ付テハ三月十日迄ニ最寄ノ日本銀行ノ本店、支店、京城代理店又ハ臺北代理店ヲ經テ大藏大臣ニ提出スベシ

- 一 申請者ノ住所、電話番号及氏名又ハ商號
 - 二 會社ニ在リテハ代表者ノ氏名
 - 三 金鑛山ノ名稱、鑛區番號及所在地
 - 四 割増金額及其ノ算出ノ根據
 - 五 日本銀行ノ本店、支店、京城代理店又ハ臺北代理店中割増金ノ交付ヲ受ケントスル店舗ノ名稱
 - 六 其ノ他參考トナルベキ事項
- 前項ノ申請書ニハ左ニ掲グル書類ヲ添附スベシ但シ本令ニ依リ既ニ提出シタル他ノ申請書ニ添附シタルトキハ其ノ旨ヲ明記シ之ヲ省略スルコトヲ得
- 一 内地所在金鑛山ニ關シテハ產金量届出規則第三條、朝鮮所在金鑛山ニ關シテハ朝鮮產金量届出規則第三條、臺灣所在金鑛山ニ關シテハ臺灣產金量届出規則第三條ノ產金增加量届出書寫又ハ產金減少量届出書寫及添附書類
 - 二 會社ニ在リテハ株主又ハ之ニ準ズベキ者ノ名簿
 - 三 會社ニ在リテハ最終ニ決定シタル事業年度ノ財産目録、貸借對照表、損益計算書及利益金處分ニ關スル書類、個人ニ在リテハ之ニ準ズベキモノ
- 第十五條 割増金交付通知書ノ交付ヲ受ケタル者ハ之ヲ第七條又ハ前條ノ割増金交付申請書ニ記載シタル日本銀行ノ本店、支店、京城代理店又ハ臺北代理店ニ提出シテ割増金ノ交付ヲ請求スベシ
- 日本銀行前項ノ請求ヲ受ケタルトキハ割増金交付通知書ト引換ニ割増金ヲ交付スベシ
- 第十六條 割増金ノ交付ヲ受ケ又ハ受ケントスル者本令ニ違反シタルトキ又ハ不正ノ行爲アリタルトキハ大藏大臣ハ割増金ノ交付額ヲ減額シ、交付ヲ爲サズ又ハ交付額ノ全部若ハ一部ノ返還ヲ命ズルコト

トアルベシ

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス
本令施行ノ日ヨリ二月以内ニ第八條ノ申請ヲ爲シタル者ニ付同條ノ指定アリタルトキハ第十一條ノ規定ニ拘ラズ昭和十五年四月一日ニ遡リ買上價格ノ割増ヲ爲スモノトス

⑧ 金準備評價法 (昭和十二年八月十一日 法律第六十號)

第一條 日本銀行ハ兌換銀行券ノ引換準備ニ充ツル金貨及金地金ヲ當分ノ内金貨幣法第二條ノ規定ニ拘ラズ純金量目二百九十「ミリグラム」ニ付一圓ノ割合ヲ以テ評價スベシ、朝鮮銀行券又ハ臺灣銀行券ノ仕拂準備ニ充ツル金貨及金地金ニ付亦同ジ
前項ノ評價ノ方法ハ大藏大臣之ヲ定ム

第二條 日本銀行、朝鮮銀行及臺灣銀行ハ前條ノ規定ニ依ル評價換ニ因リテ生ジタル利益額ニ相當スル金額ヲ大藏大臣ノ定ムル所ニヨリ政府ニ納付スベシ、但シ日本銀行ガ日本銀行金買入法ニ依リ買入レ保有スル金地金ニ付テハ同法第六條ノ規定ニ依ル

第三條 政府ハ日本銀行ニ對シ大藏大臣ノ定ムル所ニ依リ其ノ保有スル金地金ノ一部ヲ第一條ノ規定ニ依リ評價シタル價格ヲ以テ同行ニ於ケル國庫金ノ勘定ニ移スベキコトヲ命ズルコトヲ得
政府ハ朝鮮銀行及臺灣銀行ニ對シ大藏大臣ノ定ムル所ニ依リ本法施行ノ際其ノ保有スル金貨及金地金ノ全部又ハ一部ヲ第一條ノ規定ニ依リ評價シタル價格ヲ以テ日本銀行ニ引渡スベキコトヲ命ズル

コトヲ得

第四條 兌換銀行券條例第六條及貨幣法第十四條ノ規定ハ當分ノ内之ヲ適用セズ

朝鮮銀行及臺灣銀行ハ朝鮮銀行法第二十一條第二項又ハ臺灣銀行法第八條第二項ノ規定ニ拘ラズ當分ノ内朝鮮銀行券又ハ臺灣銀行券ノ金貨引換ヲ爲スコトヲ得ズ

附 則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

昭和七年勅令第四號ハ之ヲ廢止ス

第一條ニ規定スル評價ノ割合ヲ後日變更スルコトアル場合ニ於テハ日本銀行ハ其ノ變更ニ因リ兌換銀行券ノ引換準備ニ充ツル金貨及金地金ニ付生ズル利益又ハ損失ニ付大藏大臣ノ定ムル所ニ依リ其ノ利益額ニ相當スル金額ヲ政府ニ納付シ又ハ政府ヨリ其ノ損失額ニ相當スル金額ノ補填ヲ受クルモノトス
朝鮮銀行又ハ臺灣銀行ガ朝鮮銀行券又ハ臺灣銀行券ノ仕拂準備ニ充ツル金貨及金地金ニ付亦同ジ
(參 照)

昭和七年一月二十八日公布勅令第四號ハ銀行券ノ金貨兌換ニ關スル件ナリ

⑨ 金準備評價法施行期日ノ件 (昭和十二年八月二十四日 勅令第四百五十五號)

金準備評價法ハ昭和十二年八月二十五日ヨリ之ヲ施行ス

⑩ 金準備評價換ニ關スル件(拔萃) (昭和十二年八月二十四日 大藏省令第三十四號)

第一條 日本銀行、朝鮮銀行及臺灣銀行ガ兌換銀行券ノ引換準備又ハ朝鮮銀行券若ハ臺灣銀行券ノ支拂

準備ニ充ツル金貨及金地金ハ左ノ各號ノ基準ニ依リ之ヲ評價スベシ

一 金貨ニ付テハ一枚毎ニ額面價格(貨幣法第十五條ノ適用ヲ受クル金貨ニ在リテハ額面價格ノ二倍ノ金額)ニ七百五十ヲ乗ジタルモノヲ二百九十ヲ以テ除シタル金額ノ錢位未滿ノ端數ヲ切捨テタルモノヲ以テ其ノ價格トス

二 新貨條例發布以前ノ舊貨幣ニ付テハ一枚毎ニ金準備評價法施行ノ際ニ於ケル保有價格ニ七百五十ヲ乗ジタルモノヲ二百九十ヲ以テ除シタル金額ノ錢位未滿ノ端數ヲ切捨テタルモノヲ以テ其ノ價格トス

三 外國金貨ニ付テハ各種類毎ニ、金準備評價法施行ノ際ニ於ケル保有價額ニ七百五十ヲ乗ジタルモノヲ二百九十ヲ以テ除シタル金額ノ錢位未滿ノ端數ヲ切捨テタルモノヲ以テ其ノ價格トス

四 前二號ニ掲グルモノ以外ノ金地金ニ付テハ各銀行ニ於ケル整理區分別ニ純金ノ量目二百九十「ミリグラム」ニ付一圓ノ割合ヲ以テ算出シタル金額ノ錢位未滿ノ端數ヲ切捨テタルモノヲ以テ其ノ價額トス

第二條 日本銀行、朝鮮銀行及臺灣銀行ハ金準備評價法施行ノ際兌換銀行券ノ引換準備又ハ朝鮮銀行券若ハ臺灣銀行券ノ支拂準備ニ充ツル金貨及金地金(日本銀行金買入法ニ依リ日本銀行ガ買入レ保有スル金地金ヲ除ク)ヲ前條ノ規定ニ依リ評價シタル價額ノ合計ト其ノ同法施行ノ際ニ於ケル保有價額ノ合計トノ差額ニ相當スル金額ヲ大藏大臣ノ指定スル期日ニ於テ政府ニ納付スベシ

第三條 日本銀行ハ日本銀行金買入法ニ依リ買入レ保有スル金地金ニシテ金準備評價法施行ノ際兌換銀行券ノ引換準備ニ充ツルモノヲ第一條ノ規定ニ依リ評價シタル價額ト其ノ同法施行ノ際ニ於ケル保

有價額トノ差額ニ相當スル金額ヲ大藏大臣ノ指定スル期日ニ於テ政府ニ納付スベシ

第五條 日本銀行、朝鮮銀行及臺灣銀行ガ金準備評價法施行後金貨ヲ受入レ之ヲ兌換銀行券ノ引換準備

又ハ朝鮮銀行券若ハ臺灣銀行券ノ支拂準備ニ充ツルトキハ其ノ第一條ノ規定ニ依リ評價額ト額面價格(貨幣法第十五條ノ適用ヲ受クル金貨ニ在リテハ額面價格ノ二倍ノ金額)トノ差額ニ相當スル金額ヲ大藏大臣ノ指定スル期日ニ於テ政府ニ納付スベシ、但シ日本銀行ガ金準備評價法第三條第二項ノ規定ニ依リ引渡ヲ受ケタル金貨ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

日本銀行、朝鮮銀行及臺灣銀行ハ前項ノ規定ニ依リ政府ニ納付スベキ金額ヲ事業年度毎ニ計算シ遲滞ナク大藏大臣ニ申告スベシ

附 則

本令ハ昭和十二年八月二十五日ヨリ之ヲ施行ス

⑩ 貨幣法(拔萃) (明治三十年三月二十九日 法律第二十 六號)

(改正沿革)

明治三十九年四月	法律第二二八號
同 四十年三月	同 第六號
大正五年二月	同 第八號
同 七年四月	同 第四二號
同 九年七月	同 第五號

同 十一年四月
昭和 八年九月

同 第七三號
同 第五八號

第二條 純金ノ量目七百五十「ミリグラム」ヲ以テ價格ノ單位ト爲シ之ヲ圓ト稱ス

第三條 貨幣ノ種類ハ左ノ九種トス

金貨幣

二十圓

十圓

五圓

銀貨幣

五十錢

二十錢

ニツケル貨幣

十錢

五錢

青銅貨幣

一錢

五厘

第五條 貨幣ノ品位ハ左ノ如シ

一金貨幣

純金九百分參和銅一百分

第六條 貨幣ノ量目ハ左ノ如シ

一 二十圓金貨幣

一六・六六六六グラム

二 十圓金貨幣

八・三三三三三三グラム

三 五圓金貨幣

四・一六六六六六グラム

四 五十錢銀貨幣

四・九五グラム

五 二十錢銀貨幣

一・九八グラム

六 十錢ニツケル貨幣

四グラム

七 五錢ニツケル貨幣

二・八グラム

八 一錢青銅貨幣

三・七五グラム

九 五厘青銅貨幣

二・一グラム

第七條 金貨幣ハ其ノ額ニ制限ナク法貨トシテ通用ス、銀貨幣ハ十圓マデ、ニツケル貨幣ハ五圓マデ、

青銅貨幣ハ一圓マデヲ限リ法貨トシテ通用ス

第十條 金銀貨幣量目ノ公差ハ左ノ如シ

一 金貨幣二十圓ハ每片〇・〇三三四グラム一千枚毎ニ三・一一二五グラム十圓ハ每片〇・〇二二六

八グラム一千枚毎ニ二・三二五グラム、五圓ハ每片〇・〇一六二グラム一千枚毎ニ一・五三七五グラムトス

- 二 銀貨幣五十錢ハ毎片〇・〇六四一二グラム一千枚毎ニ三・九九九七五グラム二十錢ハ毎片〇・〇四〇一二グラム一千枚毎ニ一・九九九八七グラムトス

⑫ 金資金特別會計法(拔萃) (昭和十二年八月十一日 法律第六十一號)

(改正昭和十五年四月一日法律第七十八號)

- 第三條 本資金ハ總額二億圓ヲ限り豫算ノ定ムル所ニ依リ之ヲ産金ノ増加及金ノ集中ヲ圖ル爲必要ナル費途ニ使用スルコトヲ得
- 前項ノ規定ニ依リ本資金ヲ使用セントスルトキハ其ノ金額ヲ一般會計又ハ他ノ特別會計ノ歳入ニ繰入レ當該會計ノ歳出トシテ拂出スベシ
- 第四條 本資金ハ本會計ニ屬スル經費ヲ支辨スル爲必要ナル金額ヲ除クノ外大藏大臣ノ定ムル所ニ依リ之ヲ金、國債、産金振興債券、日本産金振興株式會社株式(額面總額二千五百萬圓ヲ限ル)又ハ勅令ノ定ムルモノニ運用スルコトヲ得
- 本資金ノ運用ニ關スル事務ハ大藏大臣ノ定ムル所ニ依リ日本銀行ヲシテ之ヲ取扱ハシム

⑬ 金資金特別會計法施行期日ノ件 (昭和十二年八月二十四日 勅令第四百五十六號)

金資金特別會計法ハ昭和十二年八月二十五日ヨリ之ヲ施行ス

⑭ 日本産金振興株式會社法(拔萃) (昭和十三年三月廿八日 法律第三十六號)

第一條 日本産金振興株式會社ハ産金事業ノ振興ヲ圖ル爲必要ナル事業ヲ營ムコトヲ目的トスル株式會社トス

第十二條 日本産金振興株式會社ハ左ノ事業ヲ營ムモノトス

- 一 金鑛ヲ目的トスル鑛業若ハ砂金ヲ目的トスル砂鑛業(以下金鑛業ト總稱ス)、金製鍊業又ハ金鑛業若ハ金製鍊業ノ用ニ供スル器具機械類ノ製造業ニ對スル資金ノ融通又ハ投資
- 二 金鑛業又ハ金製鍊業
- 三 金鑛業又ハ金製鍊業ノ爲必要ナル器具、機械、材料又ハ設備ノ賣買
- 四 含金鑛産物ノ賣買
- 五 委託ニ依ル金鑛山ニ關スル調査又ハ鑑定

日本産金振興株式會社ハ政府ノ認可ヲ受ケ前項ノ事業ノ外本會社ノ目的達成上必要ナル諸事業ヲ營ムコトヲ得

第二十五條 政府ハ日本産金振興株式會社ノ業務ニ關シ監督上又ハ産金事業ノ振興上必要ナル命令ヲ爲スコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ産金事業ノ振興上必要ナル命令ヲ爲シタルトキハ政府ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ之ニ因リ生ジタル損失ヲ補償ス
前項ノ補償ヲ伴フベキ命令ハ之ニ因リ要スベキ補償金ノ總額ガ帝國議會ノ協賛ヲ經タル金額ヲ超エ

ザル範圍内ニ於テ之ヲ爲スコトヲ要ス

三〇

⑬ 金使用規則(拔萃) (昭和十四年十二月二十三日改正)
(大藏省令第五十二號)

第一條 金ヲ用ヒタル製品(金ヲ含ム合金、金銀、金張地金、金箔、金絲、金粉、金液、金鍍金液及金化合物並ニ此等ヲ用ヒタル製品ヲ含ム以下同ジ)ハ當分ノ内之ヲ製造スルコトヲ得ズ、但シ醫療用トシテ必要已ムヲ得ザルモノ又ハ大藏大臣ノ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第二條 前條但書ノ許可ヲ受ケントスル者ハ左ニ掲グル事項ヲ記載シタル許可申請書ヲ大藏大臣ニ提出スベシ

- 一 申請者ノ住所、電話番号、職業及氏名又ハ商號
- 二 製品ノ種類、數量及價額
- 三 材料トシテ金地金(金ヲ含ム合金、金銀及漬金ヲ含ム以下同ジ)ヲ使用スル場合ハ其ノ金ノ品位及純量
- 四 材料トシテ金張地金、金箔、金絲、金粉、金液、金鍍、金液又ハ金化合物ヲ使用スル場合ハ其ノ數量、種類及價額並ニ含有スル金ノ純量
- 五 第三號又ハ前號ノ材料タル金ノ調達方法(買入ルル場合ハ其ノ買入先ノ住所及氏名又ハ商號)
- 六 製造ノ期間
- 七 製造ヲ必要トスル事由
- 八 申請ノ時ニ於ケル同種製品ノ手許保有高

九 製品ヲ輸出スルモノナルトキハ其ノ輸出先並ニ最近一年間ノ輸出先國別輸出實蹟
十 従業員ノ員數製造能力等營業ノ規模ヲ知ルニ足ル資料其ノ他參考トナルベキ事項

第三條 當分ノ内物ノ加工又ハ修繕ノ爲ニ金ヲ使用スルコトヲ得ズ、但シ醫療用トシテ必要已ムヲ得ザルモノ又ハ大藏大臣ノ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラズ

前條ノ規定ハ前項但書ノ許可ヲ受ケントスル者ニ關シ之ヲ準用ス

第四條 左ニ掲グル以外ノ者ニ金地金ヲ讓渡セントスルモノハ大藏大臣ノ許可ヲ受クベシ

一 政府又ハ大藏大臣ノ指定スル者

二 大藏大臣ノ金地金ノ使用又ハ讓受ノ許可ヲ受ケタル者

三 大藏大臣ノ許可ヲ受ケ發行スル金地金ノ使用券ヲ所有スル者

前項第二號又ハ第三號ニ掲グル者ニ金地金ヲ讓渡シタル者ハ金地金ノ使用若ハ讓受ノ許可證又ハ使用券ニ讓渡年月日、種類、數量、價額及自己ノ氏名又ハ商號ヲ裏書スベシ

第五條 前條第一項各條ニ掲グル以外ノ者ハ金地金ヲ讓受タルコトヲ得ズ

第十條 大藏大臣ハ必要アリト認ムルトキハ金ヲ用ヒタル製品ヲ製造スル者ニ對シ金ノ使用量又ハ其ノ製品ノ種類若ハ數量ヲ制限スルコトヲ得

大藏大臣ハ必要アリト認ムルトキハ金地金、金張地金、金箔、金絲、金粉、金液、金鍍金液又ハ金化合物ノ賣買ニ關シ價格數量又ハ取引ノ方法ヲ指定スルコトヲ得

附 則

本令ハ昭和十五年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

昭和十五年九月廿日印刷
昭和十五年九月廿五日發行

(非賣品)

編輯
兼
行人

服部文一

發行所

大阪市東區北濱五丁目三十番地
藤本プロカー
證券株式會社

印刷所

大阪市北區堂島上三丁目十五番地
谷口印刷所

印刷人

大阪市北區堂島上三丁目十五番地
谷口春雄

不許複製

405
280

